

1.1 CLASSIC GARDENS: 65

No. 1 Remains of Heijokyo The East Palace (東院) Garden

Period: Nara (c. 750)

Designer: unknown

Address: Heijō palace site, Nara

Web: <http://heijo-kyo.com/en/toe/>



初めての本格的な日本庭園であるが海洋風景の洲浜を抽象化した庭園。庭園は現代的感覚であり、このように抽象化度が高ければ、古い庭でもモダンである。



須弥山石組は日本庭園の石組としては初めてである。

No. 2 Remains of Heijokyo Miya-ato (宮跡) Garden

Period: Nara (c. 750)

Address: Heijō palace site, Nara

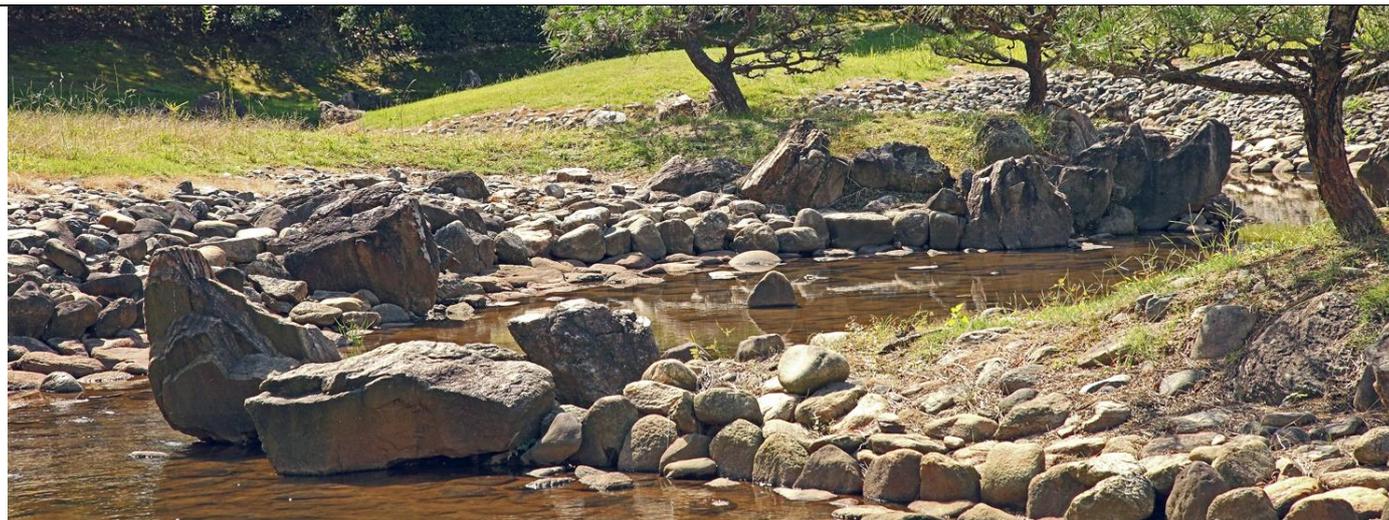
Designer: unknown

Web: <https://narashikanko.or.jp/en/spot/park/heijokyosakyo/>

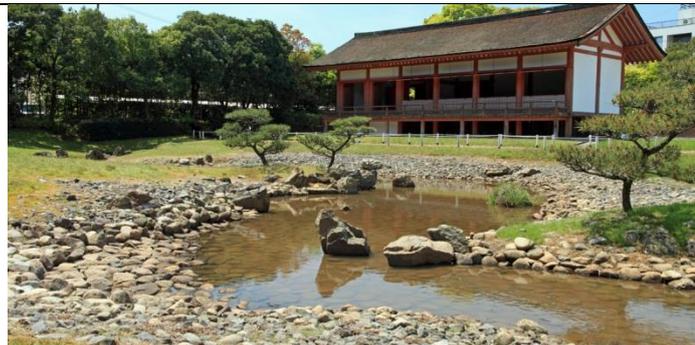


曲水の庭での宴：平安時代に作られたこの庭は人工の川の縁に座って和歌を詠み、上流から酒の入った杯が流れてくるまでに、和歌を読んだ者が酒を飲むことが出来た。上級者が上流に座るので、多くの場合は上級者が酒を飲んでしまうが、時々余興として上級者が故意に和歌を遅く書き、盃をパスすることがあった。

この行事の源点は中国の河川で行われた禊祓（みそぎはらえ）の行事である。



造形のポイント：洲浜の先端が波で洗われた様子を象徴した形



曲水庭園から迎賓館を見る



迎賓館建物から曲水庭園を見る

No. 3 Jōruri-ji (浄瑠璃寺) Temple Garden

Period: Heian (c. 1107)

Address: Kamochō, Kizugawa (Kyoto Pref.)

Designer: unknown

Tel: 0774-76-2390



極楽浄土の庭: 栗石による洲浜と洲浜の先端にある岩で作った荒磯(ありそ)の庭。



平安時代の「作庭記」によると島の造形は以下のようにすべきと書かれている。

「大海の様は、先ず荒磯の様を立てるべきである。荒磯は岸のほとりには不恰好に尖ったいくつかの石を立て、水際を基礎として立ち上がった石を、数多く沖のほうに立て続けて、その他にはなれ出た石も少々あるが良い。これはみな波のきびしくかかる所で、石が洗い出された姿である。さて所々にずっと洲崎や白浜を見せて、松などを植えるべきである。」



「荒磯」の造形を先端方向から見ると、荒磯と洲浜の造形が理解できる。

No. 4 Mōtsu-ji (毛越寺) Temple Garden

Period: Heian(c. 1100)

Designer: unknown

Address: Hiraizumi machi, Iwate Pref.

Web: www.motsuji.or.jp/



仏教哲学の理想像である須弥山を石組した。



『作庭記』の中の島姿の様々をいう事の条で「干潟様は汐の干あがりたる跡の如く半ば現れ、半ば水に浸るが如くにして、自ら砂々見ゆべきなり。樹はあるべからず。」とあり、海岸の風景として、干潮時に島が海上に現れた「洲浜」の様を再現している。



[Z]字型の遣水の造形はある程度定型化した。
この下流では「曲水の宴」が行われた。

【Garden No2 Miya-Ato (9P)】



出島の石組は最初期の亀（蓬萊山）を象徴か。
とすると、最上段の石組は鶴島になる。

No. 5 Ryūmon-ji (龍門寺) Temple Garden

Period: Kamakura(c. 1247)

Address: Matsugi Kujū-machi, Ōita Pref.

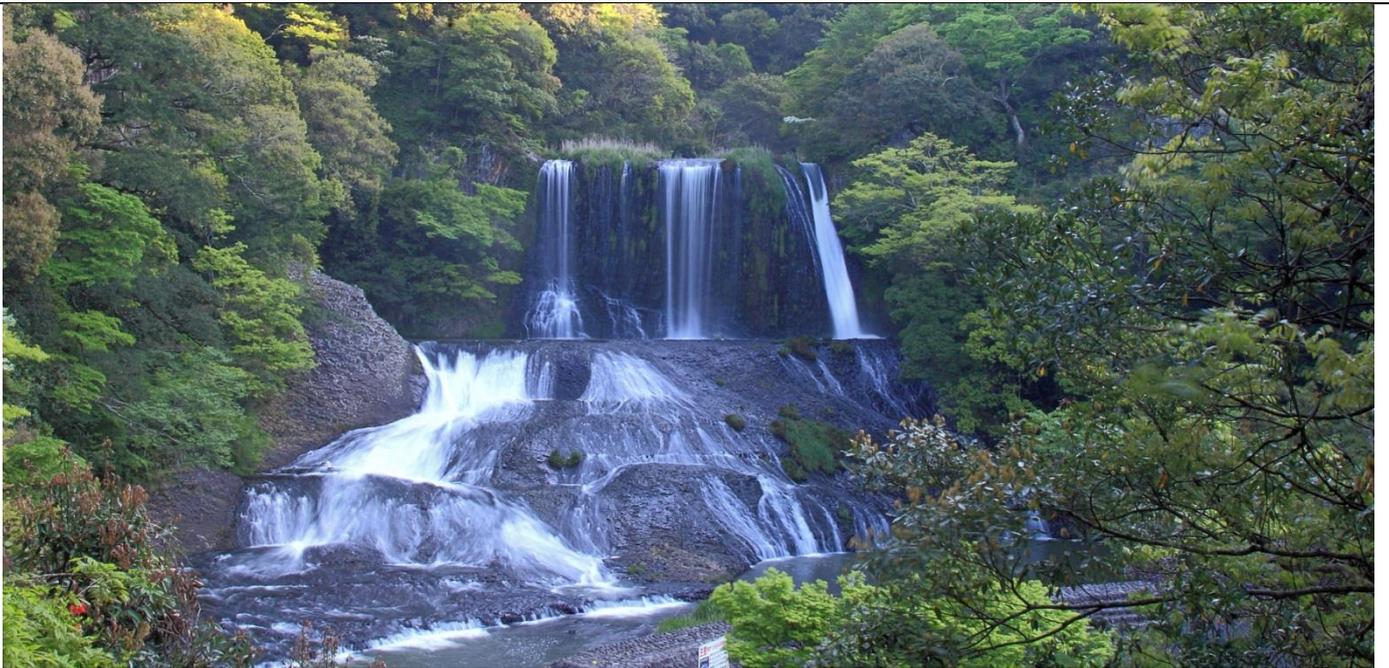
Designer: unknown

Tel : -



禅庭園の原点：庭園と言うよりは自然の風景なので、修業の場と言うべきであろう（龍門寺本堂より龍門の滝を望む）。蘭溪道隆は1247年上洛するために円通寺を出て、途中大分県の九重町で滝に出会い「龍門の滝」と命名した。そして滝の正面に龍門寺を創建し、弟子の南岳をここに残して京都に発った。

備考）この滝は自然の滝であるが、禅宗の修行道場であり、「龍門瀑」が禅宗庭園の原点であるため記した。



龍門瀑とは：中国の故事にある「登龍門」の由来である鯉が、三段の滝を登って将に龍に化す様を現している。中国南宋よりの帰化僧の蘭溪道隆禅師が中国の故事にある登竜門（鯉が死を賭してまで竜になるべく努力するさま）にならって、修行僧が観音の知恵を得る（悟る）まで、努力をしなければならぬことを日本庭園の形で教えている

No. 6 Eiho-ji (永保寺) Temple Garden

Period: Kamakura (c. 1314)

Address: Tajimi, Gifu Pref.

Designer: Musō Soseki

Tel: 0572-22-0351 Web: <http://www.kokei.or.jp/>



この庭は夢窓疎石が最初に作ったのもので、1314年40歳である。西芳寺、天龍寺に先立つこと25年前である。この地は土岐川の流れがΩ字形に曲がったところの山の上であり、禅境の地としては最高である。特徴付けているのは無際橋といわれる反橋である。これは平安時代では俗界から極楽浄土の世界へ入るものであった。ここではその伝統を受け継いでいるが、この橋を渡れば、観音堂の観音の悟りの世界に至ることを意味している。次の特色は梵音岩といわれる巖である。この巨大な巖は古代以来の信仰の対象である磐座(いわくら)であったろう。しかし、ここから滝を落としているのは、自然の風景を習ったのではなく、隣の建物の中の観音から落としていることを意味する。更に重要なのは山の上にある坐禅石だ。ここからは視界が開け、気持ちが良い。坐禅石から見る滝の流れの景色は、下に示した仏像の肩から落ちる滝の景色である。



滝見観音(永保寺):流木の仏龕の中には観音が座している。仏龕には滝を施している。



滝見観音(清雲寺)も同様な意図がある。



梵音岩を落ちる滝は観音像から落ちる滝を象徴。

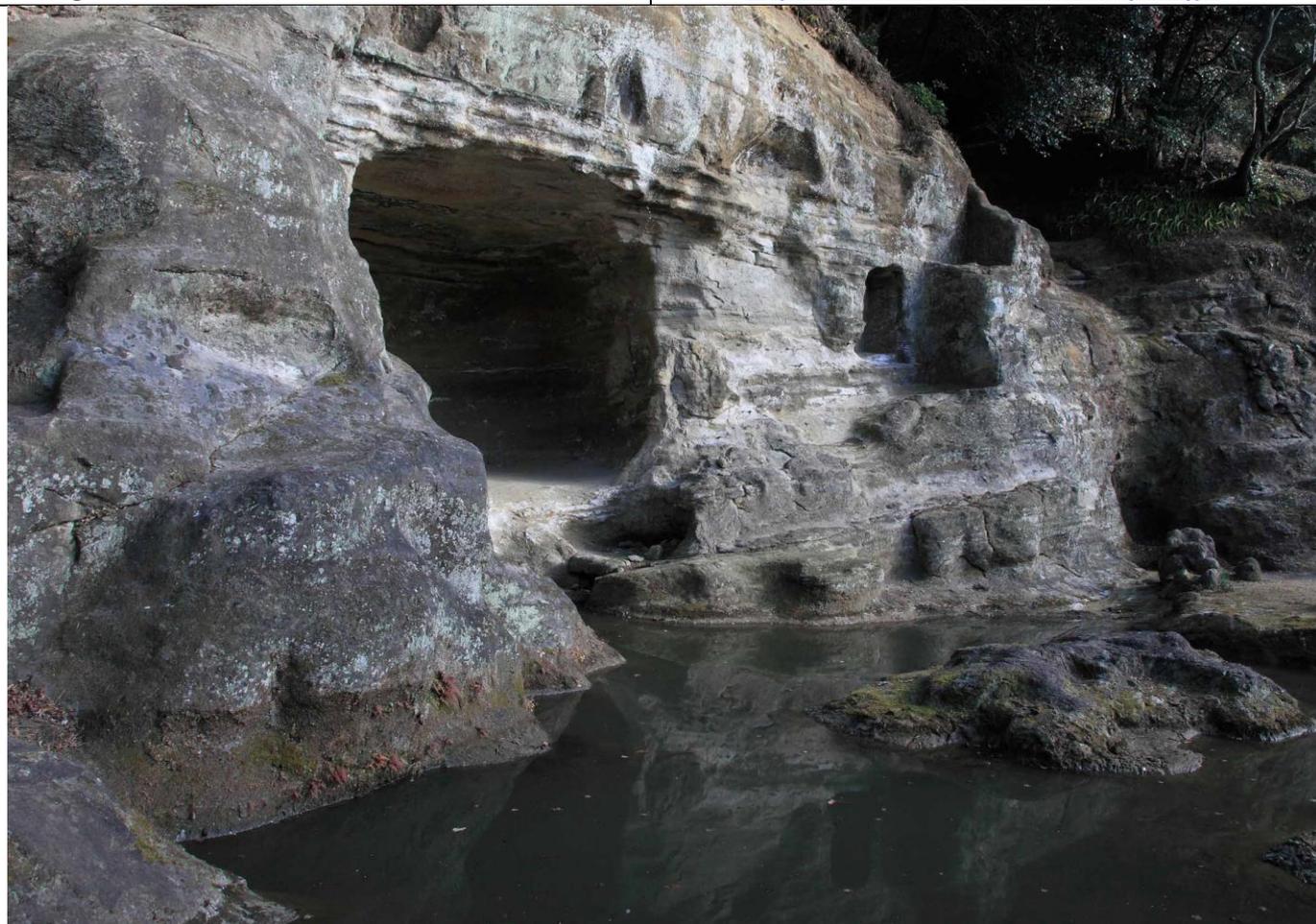
No. 7 Zuisen -ji (瑞泉寺) Temple Garden

Period: Kamakura (c.1327)

Address: Nikaidō, Kamakura

Designer: Musō Soseki

Web: <http://www.kamakura-zuisenji.or.jp/>



修行の道場: 水月観音を祭る道場であると、岩盤を穿った池がある。更に写真右下には水分石と滝がある。これは単なる自然の風景の再現ではなく、中国伝来の観音信仰を再現するための立体絵画とも、永保寺の仏象の再現とも云える。



「天女洞」の早朝



坐禅窟【葆光窟(ほこうくつ)】の明かり取り



漆黒に浮かぶ富士山



日の出直前に富士は赤く染まる



日の出後の富士山

夢窓疎石は山頂で修行したが、上記のような大地の鼓動を体感したのであろうか。

No. 8 Saihō-ji (西芳寺) Temple Garden

Period: Kamakura (c. 1339)

Address: Nishigyō-ku, Kyoto

Designer: Musō Soseki

Web: <http://www.tenryuji.com/en/>



“Koke-dera”日本庭園で最初の龍門瀑(中央寄りが鯉魚石)と修行の道場(右側の苔地で座禅)道場から造形への過渡期の庭(左側が龍門瀑の造形、右側が階段と坐禅の道場)



自然の洲浜を表象化した造形



「龍淵水」石組と坐禅石

【See Garden No. 6 Eiho-ji Temple (13 P)】



「長島」と言われる島の左側には亀頭石があり、亀島を象徴している、金閣寺の葦原島はこの島に倣った。なお、手前側の三尊式石組は、後世の三尊石の基準になった。【See Garden No. 10 (18P)】

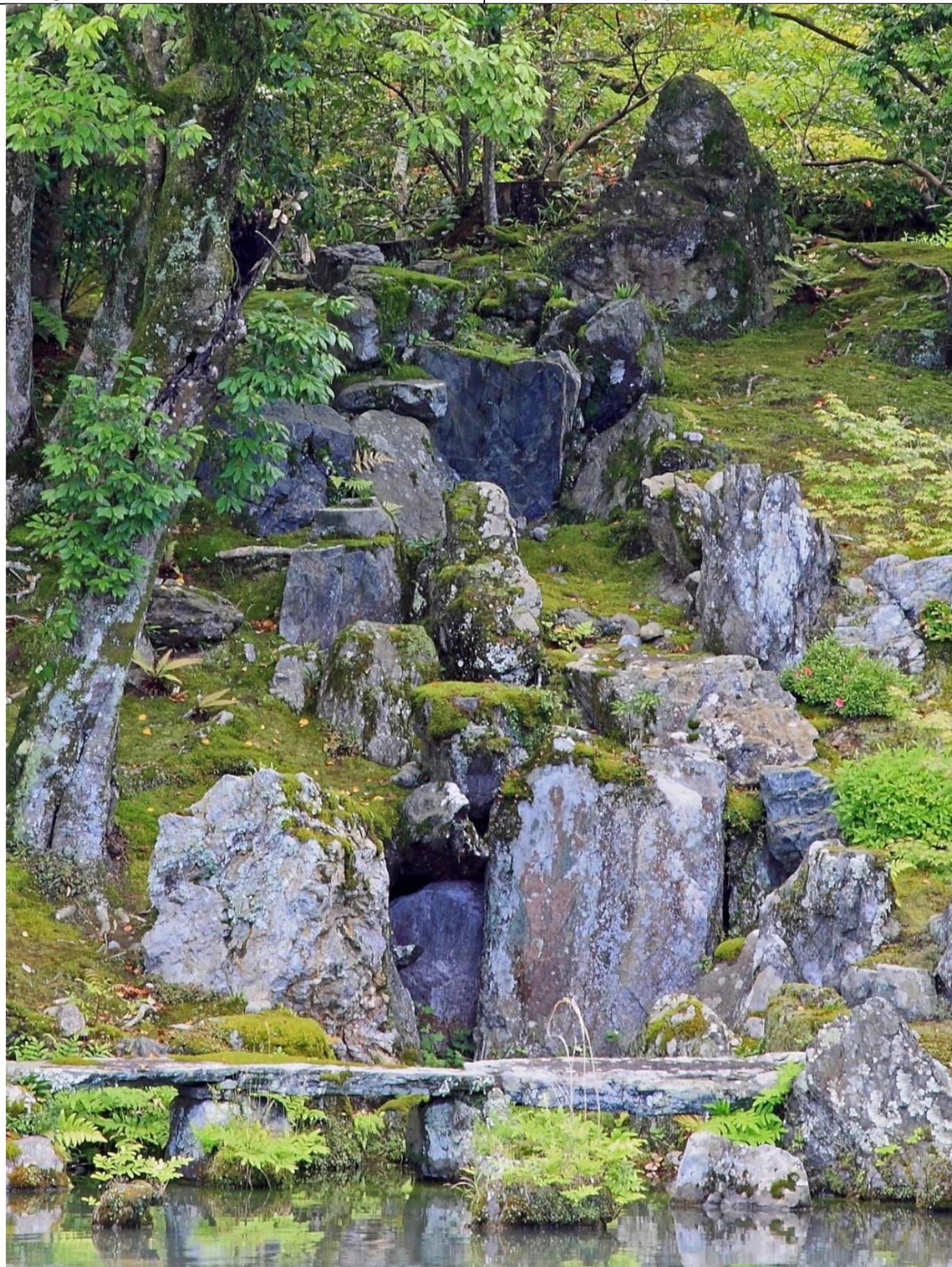
No. 9-1 Tenryū-ji (天龍寺) Temple Garden

Period: Muromachi (c.1339)

Address: Ukyō-ku, Kyoto

Designer: Musō Soseki

Web: www.tenryuji.com/



龍門瀑（上より観音石・鯉魚石・碧巖石・滝落石・石橋の三橋）

この時代になると中国の水墨画の影響で、池の周辺に護岸石組みがはじまり、日本庭園に立体的な石組が始まる。その典型的な例が天龍寺の龍門瀑石組である。「蓮華石」と言われる夢窓疎石の墓は非公開

No. 9-2 Tenryū-ji (天龍寺) Temple Garden



洲浜は庭園に奥行きを与える



龍門瀑石組の鯉魚石を横から



坐禅石を背後より見る



石橋による三橋の原点



夢窓疎石の墓は「蓮華石」と言われ、臨川寺開山堂の床下にある。

No. 10 Kinkaku-ji (金閣寺) Temple Garden

Period: Muromachi (c. 1397)

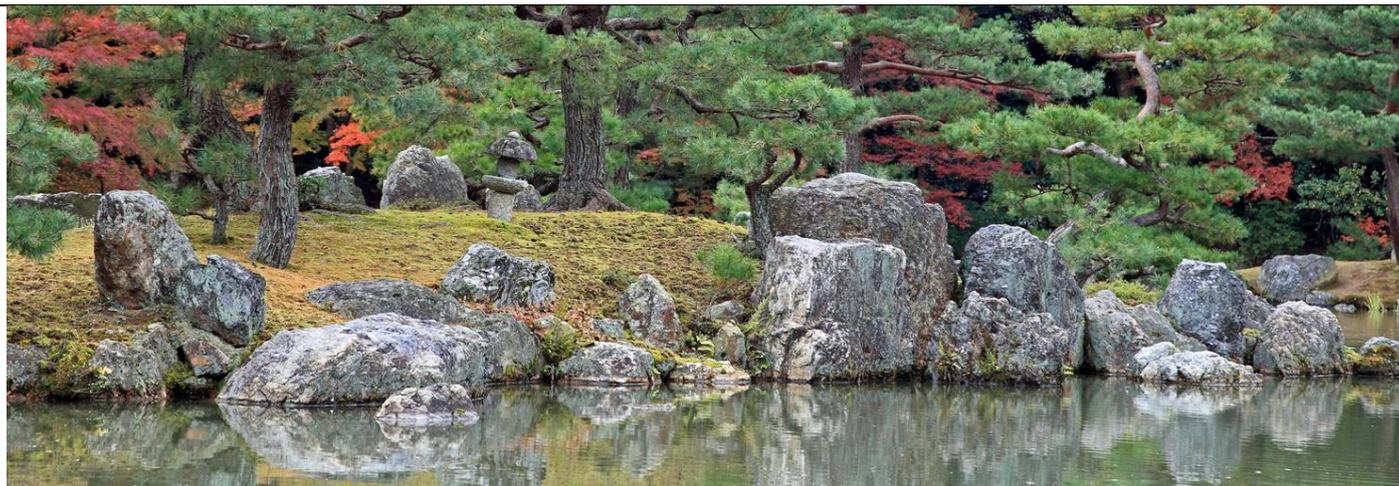
Address: Kita-ku, Kyoto City

Designer: unknown

Web: http://www.shokoku-ji.jp/k_about.html



入口に入って最初に金閣を目にして歓声を発する景：右下が亀島、中央の島が葦原島、奥が金閣



金閣側から見る有名な細川石（左）と三尊石組（右）【See No. 8 Saihō-ji Temple (15 P)】

中国の水墨画の影響で金閣の建物から水墨画の巖を見る景色を再現した。



Ashihara-jima Island は全て巨石の護岸石組で覆われた。



龍門瀑全景:観音石・猿石・碧巖石・鯉魚石



鶴島（左）、亀島、奥が畠山石

No. 11 Hōkoku-ji (保国寺) Temple Garden

Period: Muromachi (c. 1400)

Address: Nakano Saijō City (Ehime Pref.)

Designer: unknown

Tel: 0897-56-3357



立石による空間構成は、現代庭園にも通じる空間構成美の庭である。



立石が林立する中であって、稜角の鋭い二石の石が「龍門瀑」の存在感を示している。右下にある斜めの石は鯉魚石。斜面を活かした立体造形は 600 年以上も前の造形とは思えないくらい現代的である。抽象化された芸術的な石組は永遠だ。

No. 12 Ginkaku-ji (銀閣寺) Temple Garden

Period: Muromachi (c. 1490)

Address: Sakyō-ku, Kyoto

Designer: unknown

http://www.shokoku-ji.jp/g_about.html



白鶴島に架かる三本の石橋と三尊式石組(中央にある白鶴島の松の手前) 【See No8 (15 P)】



Ginkaku 前の護岸石組



山上部石組の左下にある石組みは鯉魚石か



単純化した銀沙灘と向月台は抽象造形ともいえる。

No. 13 Hekigan-ji (碧巖寺) Temple Garden

Period: Muromachi (c. 1466)

Address: Kikuchi, (Kumamoto Pref.)

Designer: unknown

Tel: 0968-25-7232

碧巖録の言葉が、そのまま視覚化された造形が作られた。1466年頃に菊池家20代当主の為邦が肥後守護の職を嫡子重朝に譲り、亀尾城下の山紫水明の地に隠居して、日夜『碧巖録』の研究に励み仏門に入った。彼は武将に『碧巖録』を講じたと言われている。庭園はその時に作られたと考えられている。



碧巖録の世界が忠実に眼前に蘇る

- ・護岸左からの名称: 龍尾石、龍の足、龍腹護岸、達磨石、碧巖石(左右に観音石と猿石)、龍門瀑
- ・池中左側からの名称: 鯉尾石(龍尾石の手前)、九山八海石(画面中央)、小鳥を象徴した小石、鯉魚石(立石)。



『碧巖録』に因んだ中央にある碧巖石と、その左右にある小さな石は観音石と猿石。池中の水平な石は坐禅石。このような造形のある庭園は金閣寺龍門瀑の左側にあるので、参考にして欲しい



「五灯会元 夾山」より

猿抱子帰青嶂後 鳥啣花落碧巖前

猿は子を抱いて青嶂の後ろに帰り

鳥は花をふくんで碧巖の前に落つ

碧巖石(画面中央) 向って右側が猿石、碧巖石の前にある池中の傾斜した石は鳥が碧巖の前を滑空している物語を視覚化した造形。

No. 14 Fugen-ji (普賢寺) Temple Garden

Period: Muromachi Period

Address: Murozumi Hikari (Yamaguchi Pref.)

Designer: unknown

Tel: 0833-79-1223



余白の多い枯山水庭園：枯滝を挟んで左右に巨大な伏石と鯉魚石がある。



枯滝に向かう鯉魚石



深い溝が縦に二筋入った



伏せ石が使われている：龍門瀑の左手前にある伏せ石（長さ：450 c m、高さ：102 c m）は古典庭園の中にあつて特異な存在。

No. 15 Jōei-ji (常栄寺) Temple Garden

Period: Muromachi (c. 1470)

Designer: Sesshū Tōyo

Address: 2001 Miyanoshita Yamaguchi City

Web: <http://sesshu.jp/sesshutei/>



遠近法に依る石組みは中国の水墨画の影響。手前に大きな石を配置し、奥に行くに従って小さな石を使う。これにより造形に奥行きが出る。この石組が傑作の理由は手前の二群の石組みが、背後の石組群よりも、約 1m および 0.5m 低く配石されていることだ。遠近法効果を最大限引き出すために、手前には最大限大きな石を配石する手法。



長大な龍門瀑（滝は 7 段 20m）を鯉魚(右下)が滝を登り龍に化身する瞬間



背後の石組が鱗状にメカニックなのは、鯉魚が飛翔して龍に化身する瞬間を暗示した造形。



山畔にある回遊路石組：水墨画の高士が歩く山道を表している。雪舟作の水墨画と同じ構図。水墨画で実現できなかった三次元化を楽しんだと思う。



雪舟の「四季山水図巻」(春)では途切れ途切れの山道が、左奥で消えているが、これを反転すると左の庭園と同じ構図になる。

No. 16 Manpuku-ji (萬福寺) Temple Garden

Period: Muromachi (c. 1479)

Address: Higashimachi Masuda City

Designer: unknown

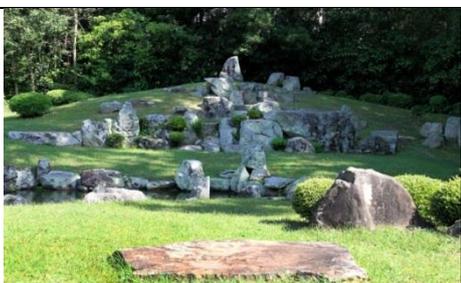
Tel: 0856-22-0302



半球状に盛土した築山に仏教哲学の「九山八海と須弥山石組」を作った。



庭園に使われている石は総て稜角の鋭い白みがあった石。圧倒される造形美は石の選択に負うところが大きい。庭は中央にゆったりとした築山を築き、その上に九山八海の石組をして、頂上には須弥山が聳えている。



坐禅石と九山八海石組



庭園を横から見る



池の右端に端正な龍門瀑がある

No. 17 Ryōgen-in (龍源院) Temple Garden

Period: Muromachi (c.1517)

Address: Daitoku-ji Kita-ku, Kyoto

Designer: Shiken Seidō

Tel: 075-461-0013



本来は方丈建物の南庭に庭を作る事は禁じられていた。宗教本来の重要な行事をする場所であるからだ。しかし方丈内の空間や廊下が広くなると、南庭での行事が行われなくなって来た。とはいえ、本来の聖なる空間に、遊びの造形物を作ることは憚られた。しかし当庭のように方丈の北側や北東の角(大仙院)ならば良しとして、悟りの導きとなるような庭が作られ出したと思われる。

石組の造形は須弥山とも解釈できるが、寺名に因んで龍とも考えられる。

なお、この主石は右側に傾斜しているが、傾斜の方向が背後の三門方向である事から、この庭園が出来たのは山門が出来た 1524 年以前と思われる。



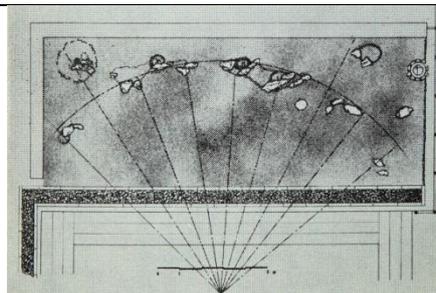
石組の拡大：左端の立石は龍尾石で、右側の円形石は龍の玉の象徴か。



左記写真の左端を拡大すると、明確な形の立石があるが、これは龍の尾を象徴とおもう。



龍の象徴とも思われる。



平面図は弧状になっており、龍安寺の前段階の習作とも考えられる



現代庭園の傑作がある

【See Garden No96 (108P)】

No. 18 Kyū-Shūrin-ji (旧秀隣寺) Temple Garden

Period: Muromachi (c. 1528)

Address: Kutsuki Takashima City Shiga Pref.

Designer: Shiken Seidō

Tel : 0740-38-2103



比較的小さな庭であるが、どのような角度から見ても飽きさせない凄さが溢れている。背後に低めの築山を築き、浅い池であるが鶴島、亀島がある。鶴島は日本一ともいえる大胆な造形だ。亀島の亀頭石は元気よく垂直に組まれ、手前の四角錐状の横石は亀尾石。出島は逆L字形に入り組まれ造形にインパクトを与えている。護岸の石は縦石と横石がバランスよく組まれている。橋は厚いが低めに架けられている。このようにコンパクトでありながら小気味よい切れ味に溢れた庭である。足利時代最後の光芒を見る思いだ



右に鶴島、左に亀島があり中央奥に蓬莱山がある。典型的な鶴亀蓬莱の庭だ。



造形過剰にせずに、必要最小限度の石で空間構成



左上部の蓬莱山から流れる滝

No. 19 Kitabatake-Jinja (北畠神社) Shrine Garden

Period: Muromachi (c. 1529)

Address: Misugi-mura Tsu, (Mie Pref.)

Designer: Shiken Seidō

Tel: 059-275-0615



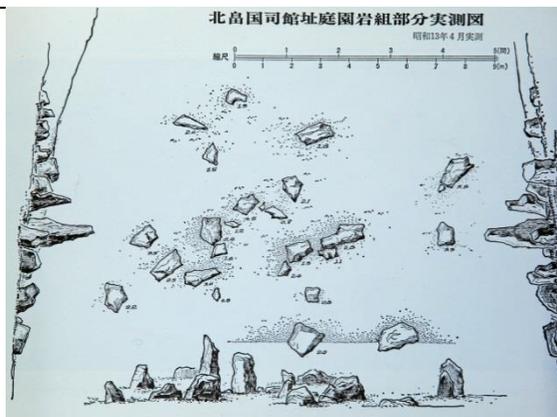
中央に 192cm 須弥山を中心とした九山八海を象徴している。周囲の石は螺旋形に見える。



須弥山石は刀の切っ先の様な形をしている。周辺の石は右巻きの螺旋状に見える。



池庭は「米」字の池と言われるような出入りの多い地割である。細くて長い 7 本の出島の護岸は比較的大きな石で組まれている。古典庭園の中でもっとも複雑な形をしている。



重森が 1938 年に測量した図面

No. 20 Ryōan-ji (龍安寺) Temple Garden

Period: Muromachi (c. 1537)

Address: Ukyō-ku, Kyoto

Designer: Shiken Seidō

Web: https://kyoto.travel/en/shrine_temple/134



奇跡的に残った日本庭園の最高峰。しかし、時代の波にもまれ造園時の姿とは異なり、庭園は三方向から小さくなり、土塀越しの自然の風景が見えなくなり本来の鑑賞が出来ない。しかし遠近法、自然美との好対照の人工造形美、最小の石組みによる空間構成美こそが石組美の到達点である。

- 全部で 15 石が抽象的に配布されている(左より 5 群の石組みは 5+2+3+2+3)。
- 手前にある左右の石はやや大きく、壁側の石は低い石を選択しているが、方丈から見て遠近効果を出すような石組にしている (奥行きが浅くても狭隘感を感じにくい)。
- 壁の背後の木が繁茂しすぎている。そのため本来見えていた京都の山並みや、市街地が見えなくなってしまった。創建時は背後に見えた自然界と塀の内側にある人工界の対比により、人工的な造形が、その美しさを際立たせていたのであった。



庭園を左側から見ると、手前の小石と奥にある石組みは直線状に関連している。



個性的な石組群



中央に見える 3 組の石組は有機的に繋がっている

No. 21 Daisen-in (大仙院) Temple Garden

Period: Muromachi (c.1509-1560)

Address: Murasakino kita-ku, Kyoto

Designer: unknown

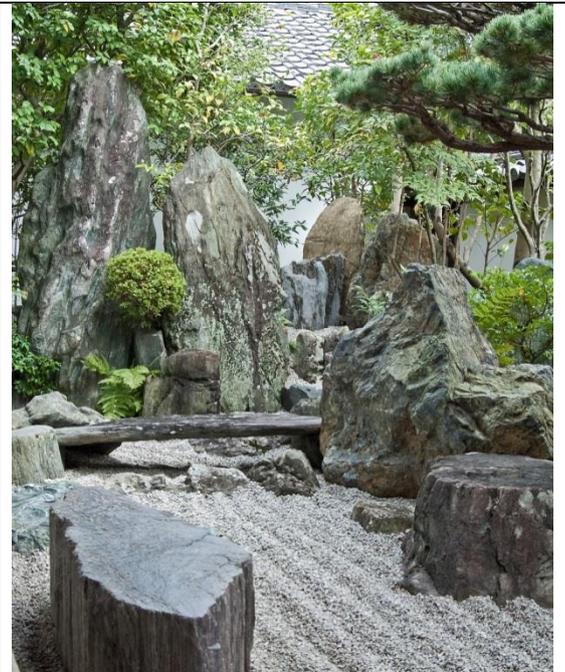
Tel: 075-491-8346



1509年古岳宗亘（こがくそうこう）禅師が作ったといわれる。師は禅の悟りを分かり易く教えるために、狭い場所に禅の庭を作った。しかしその後、阿波の緑石などが寄贈され豪華に石が組み立てられている。観音石、不動石、龍門瀑、石橋、鶴亀蓬莱、舟石、坐禅石、沈香石、叡山石などあらゆる要素を含んだ盛りだくさんの庭となってしまった。



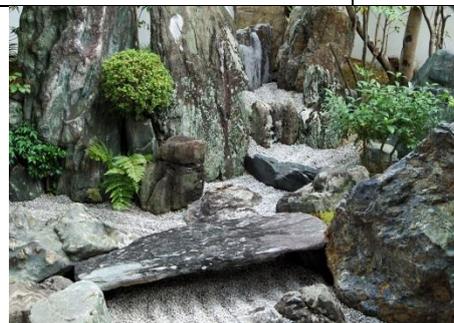
具象的内容を山水画の様な抽象的手法で表現した庭。不動石(左)と観音石(右)、その右側から滝が流れ出し激流になってくんだり、大河となる。石英の筋が入った石が水落石。



縁側沿いの石が縁側と建築の一体感の役



後世の改修で名石尽くしの庭に



滝と鯉魚石の拡大写真



大河の流れに小舟が浮かぶ

No. 22 Taizō-in (退蔵院) Temple Garden

Period: Muromachi (c. 1558)

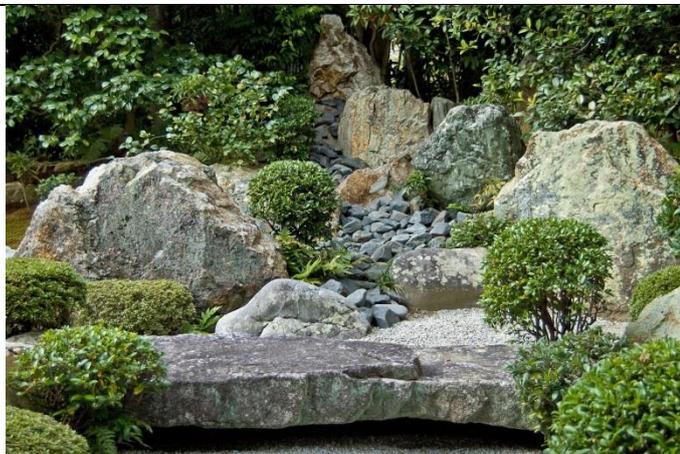
Address: Hanazono Ukyō-ku, Kyoto

Designer: Kanō Motonobu

Web: <http://www.taizoin.com/en/>



この立体山水画ともいえる庭は狩野派の祖と云われる狩野元信の作と云われている。と云うのは、庭の構成は伝狩野元信筆の「琴棋書画図」(霊雲院蔵)の滝や石橋の位置、石組みの構成などがそっくりであるから。



滝前の石橋は亀島に架かっているが、本来神仙島(亀島)には人間が踏み込めない聖域であった。



水墨画では滝の前に橋が架かっているもので、伝統が打破されたのであろう。(出典:野村勘治氏のスケッチ)



現在蹲踞がある場所は当初は鶴出島であった。築山には蓬莱連山があるので、鶴亀蓬莱の庭

No. 23 Gangyō-ji (願行寺) Temple Garden

Period: Muromachi (c.1567)

Address: Terauchi Shimoichi-chō, Nara

Designer: Shiken Seido

Tel: 0747-52-2344



浄土真宗の庭園のテーマとして「龍樹による易行品」があるが、ここでは庭園テーマとして「他力」の象徴を「易行水道楽」とすることになったと思われる。



「易行水道楽」については、竜樹に始まり曇鸞、道綽を経て親鸞に至っている。

「**顕示難行陸路苦** 信楽易行水道楽」

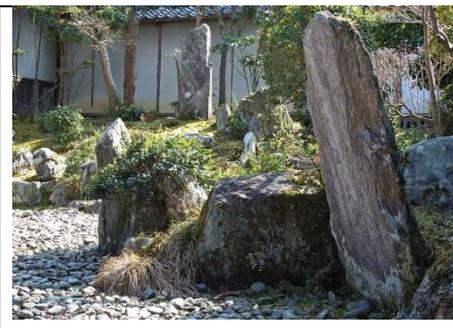
難行の陸路、苦しきこと顕示して 易行水道、楽しきことを信楽せしむ。出典：浄土真宗本願寺派の『正信念仏偈』



「**蔡華**」蔡は亀の名、華は蓮華の略
白亀が白蓮華に乗って現れるの意＝
分陀利華 出典：真宗辞典



上記造形は舟に乗って阿弥陀の世界に渡る象徴。



正面立石は阿弥陀如来を象徴している。迷わず「易行水道楽」の後には阿弥陀如来が待っている。

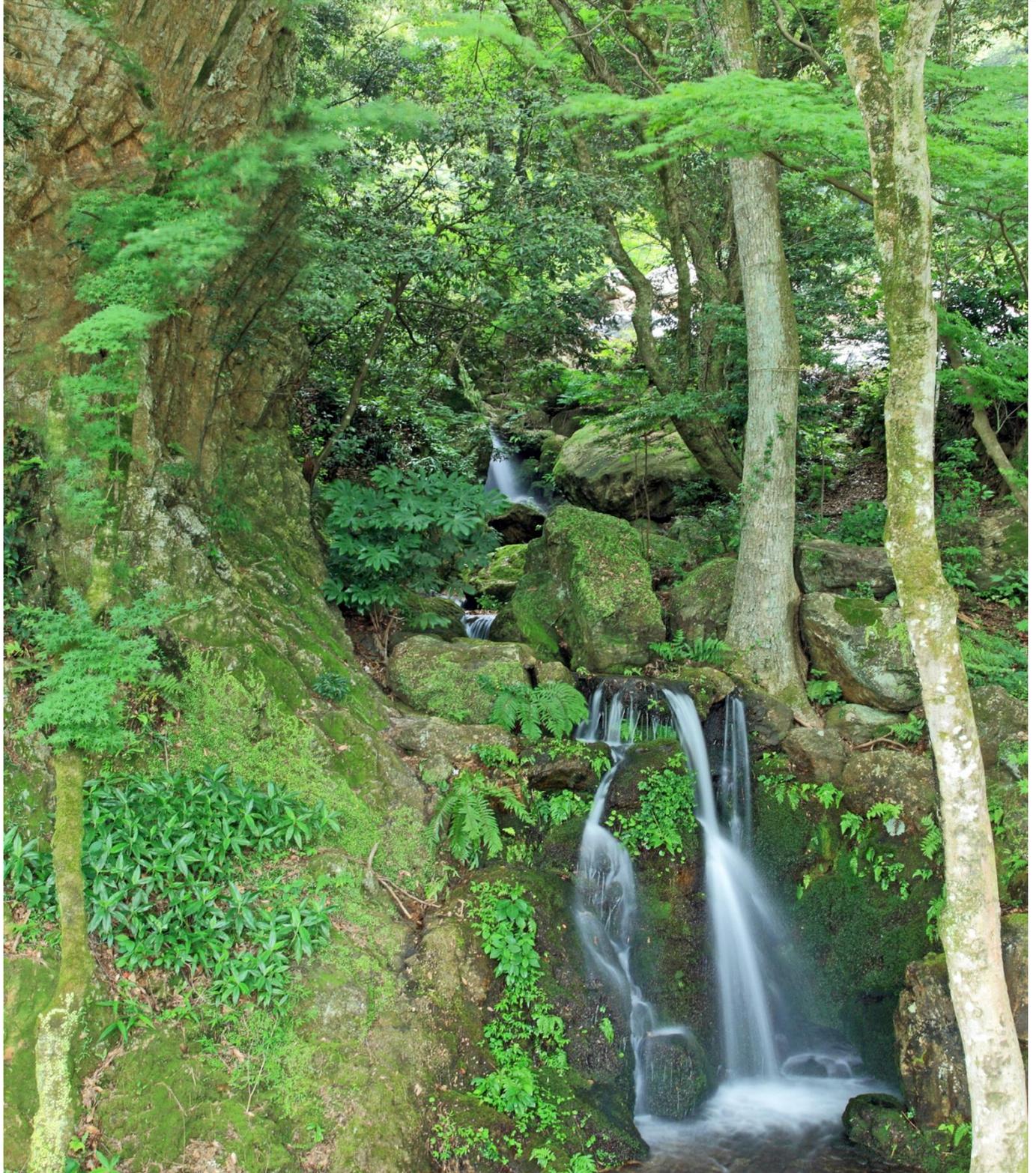
No. 24 Gifu Castle Ruin (岐阜城館跡) Garden

Period: Muromachi (c. 1567)

Address: 1-11 Kanda-machi, Gifu City

Designer: unknown

Tel : <http://www.nobunaga-kyokan.jp/>



滝の左側の岩盤は鑿で穿かれ、水墨画のオーバーハングの造形を実寸大で人工的に作られている。以下に雪舟などの水墨画の例を示す。雪舟(左3枚)、狩野正信、芸阿弥筆の5枚。



「山水図」牧松・了菴賛・国宝



「四季山水図」ブリジストン



「四季山水図」東博



蕭湘八景図・東海庵



観瀑図・根津美術館

No. 25 Gardens at Asakura Clan (朝倉氏遺跡) Ruins

Period: Muromachi (before 1573)

Address: Kidonouchi-chō, Fukui Pref.

Designer: unknown

Web: https://www.fuku-e.com/010_spot/?id=2



諏訪館跡 山裾に雛壇状に石が組まれた戦国時代を代表する質実剛健な庭だ。石橋はこの時代の特徴である分厚い石を用いている。



諏訪館跡：護岸石組は、さして大きくない石を使っているため、石の出入り大きい。動きがあるこの造形は護岸石組の白眉。



湯殿跡庭園：滝・鶴島・亀島・三尊・蓬莱山石組などがある。



同左：背後の山から水を誘導して滝があった

No. 26 Mitamura-ke (三田村家) Family Garden

Period: Muromachi (before 1573)

Designer: unknown

Address: Ōtakimachi Echizen, Fukui Pref.

Private



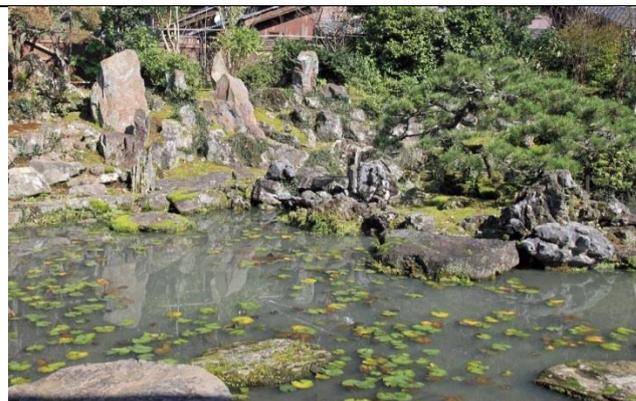
西側の書院から見た池泉の全景: 池中の浮島や護岸の立石(両界石)が古式な様式を感じる。庭園は五角形をした池に中島があり、その左右に三つの石橋が架かっている。



画面左側には大きな築山が作られ石柱が林立しているが、石は手前が大きく、奥まるにつれて順次小さく生まれ、遠近法の効果が発揮されている。瀧は中島の左側にあるが、申し訳程度のデザインで、後世のこれ見よがしの大きさではない。中島に架かっている三つの石橋は銀閣寺の白鶴島に架かっている地割と同じ様式である。



技巧に走らない質実剛健な石組だ。石の選択が重要。



インスピレーションに従いスピード感を以て組まれた

No. 27 Hikosan (英彦山) Gardens

Period: Muromachi

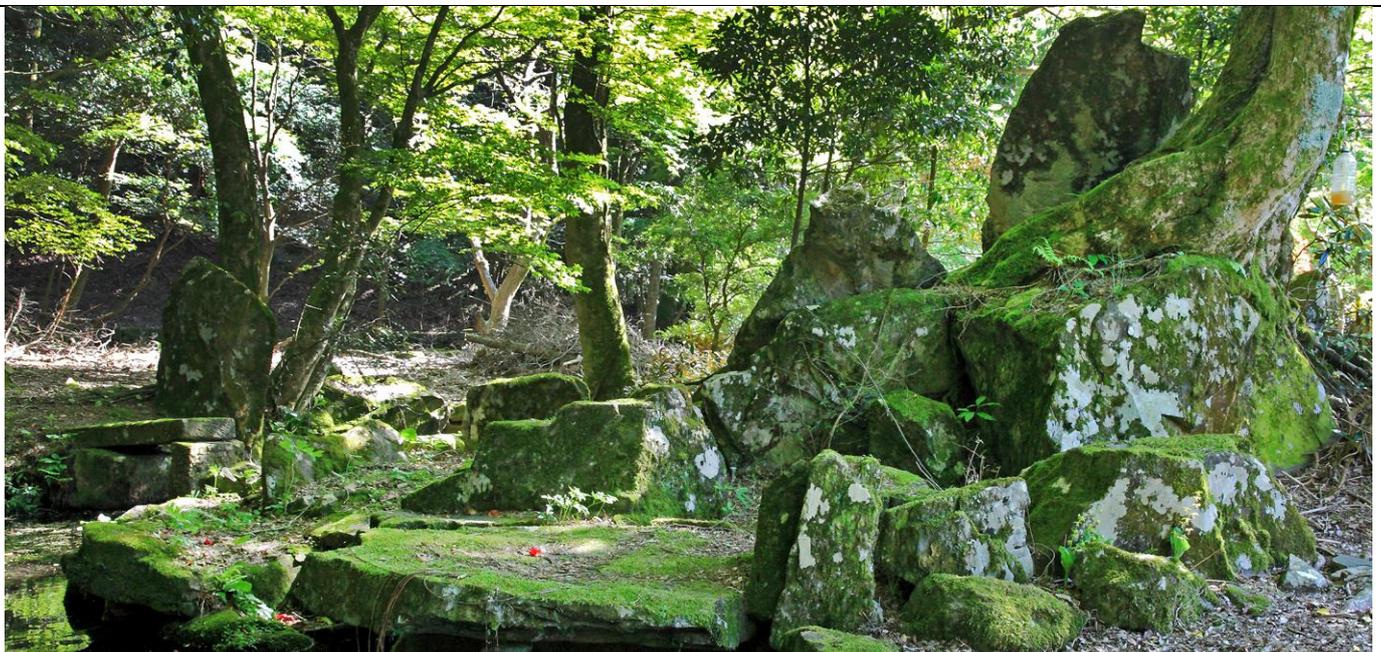
Address: Hikosan Soeda-machi, Fukuoka Pref

Designer: unknown

Kyū-kameisi –bō: 947-85-0026, Kyū-zasu-in: Private, Mandokoro-Bō: Free



旧亀石坊 (c. 1476): 入り組んだ護岸と巨大な亀石が古式な庭園様式を感じさせる。



kyū-zasu-in (c. 1581): 鶴亀兼用の石組(水平の石は鶴首石、木立背後の立石は鶴の羽石、手前は亀の亀甲石)。



Mandokoro-bō (1600 頃):

山裾にある池庭の護岸石組は野性の猛々しさに感嘆。技巧を求めずインスピレーションに従った造形。

No. 28 Honpō-ji (本法寺) Temple Garden

Period: Momoyama (c. 1590)

Address: 617 Honpō-ji mae-machi, Kyoto

Designer: Honami Kōetsu

Tel: 075-441-7997



滝添え石は宗祖日蓮と開山の日親を表し、斜めの石は虹色の滝で日蓮の発する仏法を象徴しているか。当庭は日蓮宗の信者であり、画家でもある本阿弥光悦によって作られた三次元絵画とも云える。



半円形の石を合わせ「日」とした。
(廊下から見た像を90度回転)



不等辺十角形による蓮の造形は日蓮の「連」を象徴した。日蓮宗の信者である本阿弥光悦の作品

No. 29 Nishi-hongan-ji (西本願寺) Temple Garden

Period: Edo (c. 1611)

Address: Shimogyō-ku, Kyoto

Designer: unknown

Tel: 075-371-5181 (Reservation required)



庭の構成は鶴島と亀島の上に蓬莱連山と枯滝があるが、鶴島と亀島は余りにも具象的すぎる。だが切石による美しい曲線の橋を採用したことは、自然石のみの庭園に新風を巻き起こした。

信仰の庭であり、鶴島亀島の間から枯滝が落ちているが、真の目的はその奥にある御影堂を親鸞と見立て教祖への尊崇の念を表している。御影堂に向かったの蘇鉄は親鸞聖人への献花



枯滝：迫力の枯滝はこの時代を象徴している。蓬莱連山はこの滝の右側にある。

No. 30 Entoku-in (圓徳院) Temple Garden

Period: Momoyama (c.1624)

Address: Higashiyama-ku, Kyoto

Designer: unknown

Tel: 075-525-0101



L型に築山を築き巨石を所狭しと並べている



枯滝石組は中心となる要が不明のため求心力が失われ、散漫な印象を受けるが、この時代の美学である。目を引くのは鶴島と亀島に架かる分厚い石橋だ。桃山時代になると神聖たるべき蓬莱島へ橋が架けられるようになる。その背景としては既に天下人となった武将は蓬莱島を理想の島とは考えなくなったためである。秀吉が伏見城で楽しんだ様がよく分かる一品。中央の島が亀島でここに三本の石橋が架かっている。何れも桃山時代を代表する橋で面目躍如とも云うべき厚さだ。



安土桃山時代の豪華絢爛たる庭。中央の島は鶴島で、鶴島と亀島を結ぶ橋は良く見ると二橋になっている。三橋の原点は天龍寺である(16,17P 参照)。なお鶴島の右側には石橋が架かっているが、伏見城にあった時は木橋であったと考える。

No. 31 Fukada-ke (深田家) Family Garden

Period: Muromachi—Early Edo

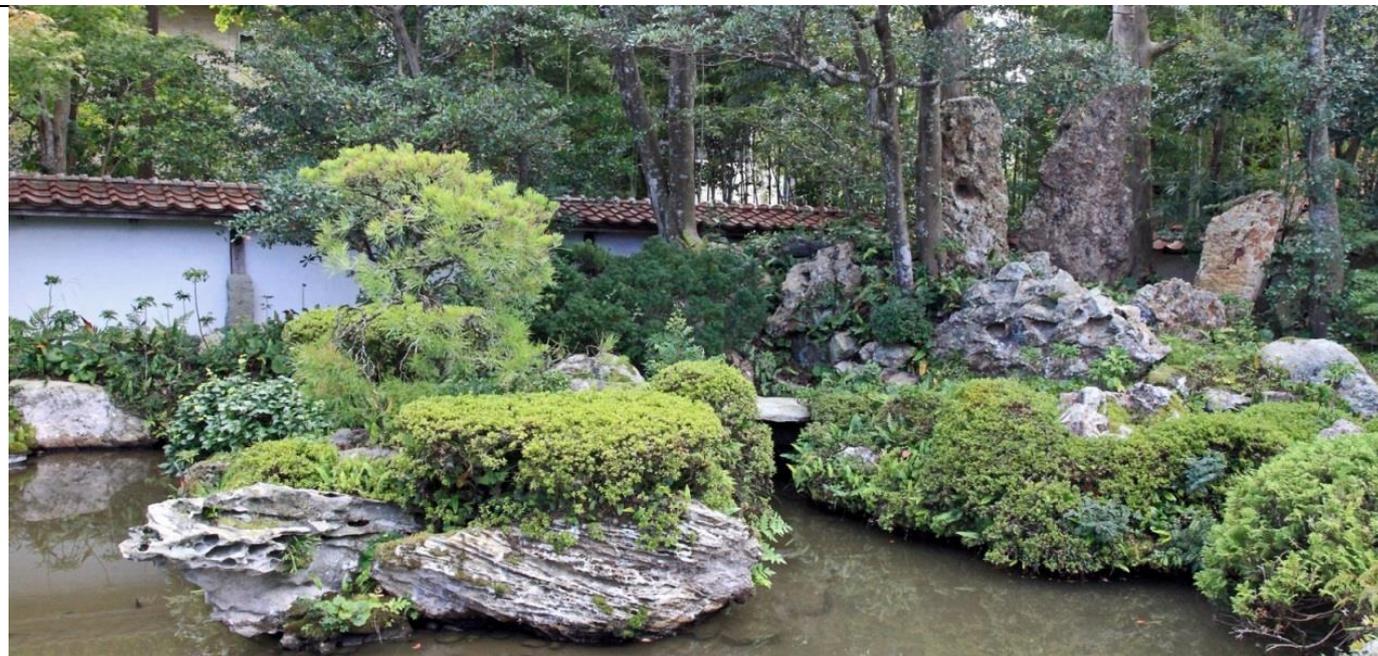
Address: 5-6-25 Kuzumo Yonago (Tottori Pref.)

Designer: unknown

Reservation Required Tel:085-93-3445



書院後からの景：左端に亀島の亀頭石、中央に鶴島、右側の出島には蓬莱山を象徴していると思われる三尊石組みがある。



池中の鶴島は古いテーマの造形であるが、最高の石の選択により、具象的造形にならず抽象的造形に昇華されている。一方、右側出島上の三尊石組および基壇の造形は火炎のように揺らめく姿に戦慄を覚える。



左側に亀島（亀頭石が立ち上がっている）、右側が鶴島。鶴亀一對の単純化した造形は最古にして最高。

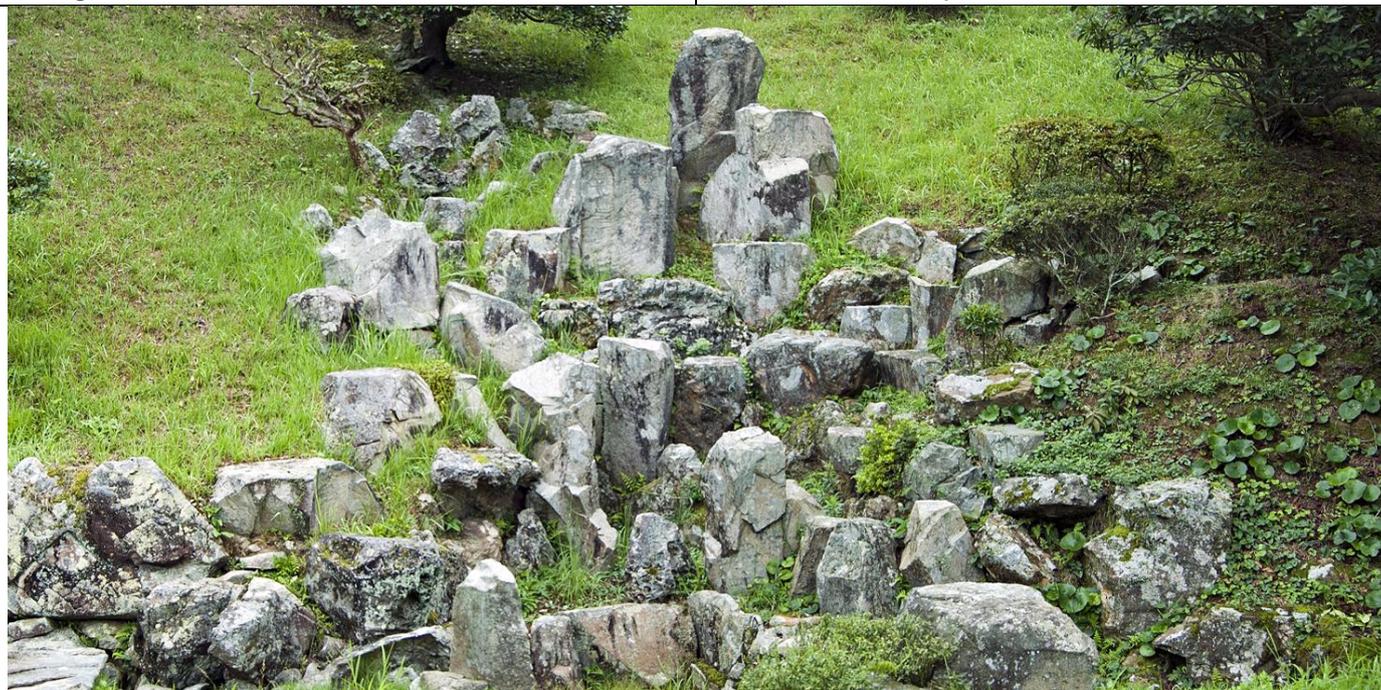
No. 32 Ogawa-ke (小川家) Family Garden

Period: Muromachi—Early Edo

Address: 165 Wagi-machi Gōtsu (Simane Pref.)

Designer: unknown

Reservation Required Tel:0855-53-1213



庭園は山畔を活かして、上部に三尊枯滝が威厳をもって添えられている（主石は約 150 c m）。いかにも装飾的でなく古式な感じを受ける。その下には山から誘導された水により滝が落ちるようになっている。室町時代の古式な滝組の好例である。

作者は石の選択にあたり、何れも石の上面が水平の立石のみで、造形にインパクトがある。



左側面より撮影：主石が前傾していることが解る



右側面よりの撮影：枯滝の段丘状石組み

No. 33 Akada-ke (赤田家) Family Garden

Period: Early Edo

Address: 133 Ōta-machi Nagahama (Shiga Pref.)

Designer: Renyo Group

Reservation Required Tel: 052-937-0607



間口と同じくらいの奥行きのある地割で石組みは画面を横切るような斜線状に生まれ、視線は自ずと左奥の築山に誘導される。立石はさほど大きくはないが、鶴島の羽石状の石、滝近くの細長い立石、左側護岸の仏像を象徴したような石、築山には枯滝状の石が分散して布石され空間構成美の庭だ。特に目立った造形が無いので、具象的でなく抽象性の感じられる庭園だ。逆遠近法の構成は、右下の護岸は丸くて横石であるが、左側には大きな石が立ち、築山には護岸から奥に行くに従って大きな石になっている。【See Garden No23 願行寺(31P)】



庭園: 三尊式枯滝は最奥部にあるが山畔の巨石の石組みで、その存在感を増す手法である。万事具象的な造形ではなく、全体のバランスが取れた造形が静謐な庭にしている。

当家は真宗の道場であり「二河白道」の説教の庭

中国唐時代の善導(613—681)が説いた極楽への道。恐ろしい火・水の二河に挟まれた細い白道を越えねばならないが、躊躇をしていると、東岸の釈迦如来から早く渡れ、死の災いはないという声、西岸の阿弥陀如来は必ず守るからという声に励まされ、信じて西岸に達した。西方浄土に至る道を譬えたもの。

その核心となる造形

白道は一般的には白い石で象徴されるが、この庭は釈迦(小舟背後の大きな石)に励まされ、信者は小舟に乗って阿弥陀(築山上の主石)の極楽浄土の世界に進む行人の姿を象徴。恐ろしい「二河白道」を渡りきったところには阿弥陀如来が待っている。教えでは舟で渡ること良い、との教えを記す。

「**顕示難行陸路苦 信楽易行水道楽**」

難行の陸路、苦しきこと顕示して 易行水道、楽しきことを信楽せしむ。出典:浄土真宗本願寺派の『正信念仏偈』

亀島背後にある造形は舟を象徴していて、『正信念仏偈』の「易行水道」とあるように、阿弥陀如来の本願を信ずる者は、陸路を行くよりも船路に行く方が、安楽であることを示唆している。手前の白蓮華の上の白亀が分陀利華を象徴し、その上に釈迦如来が勇気を出して舟に乗り込むように励ましている様を象徴、奥の舟は易行水道を象徴した説教の庭。

No. 34 Kyū-Tokushima-jō (徳島城) Castle Garden

Period: Momoyama (c. 1602)

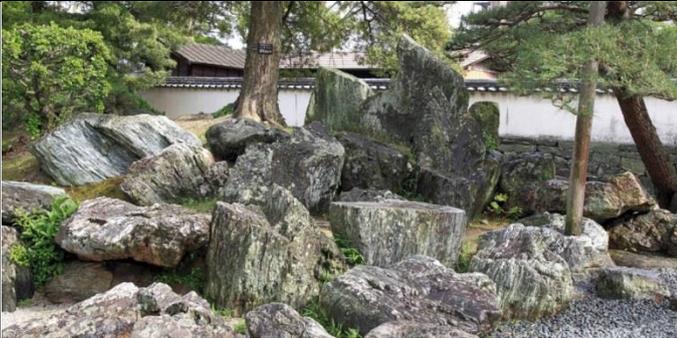
Address: Tokushima-machi, Tokushima

Designer: Ueda Sōko

Tel: 088-656-2525



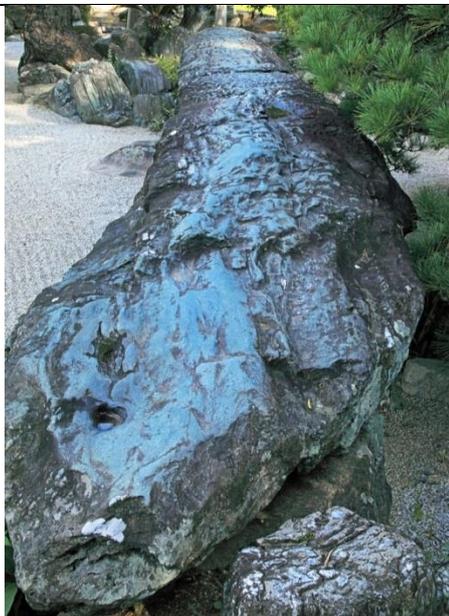
“Senshū-kaku Garden” 池庭には護岸が不可欠であるが。絢爛豪華これに極まれり。以降は護岸以外の造形に関心が向く。



これぞ上田宗箇と云える高度に象徴化された鶴島



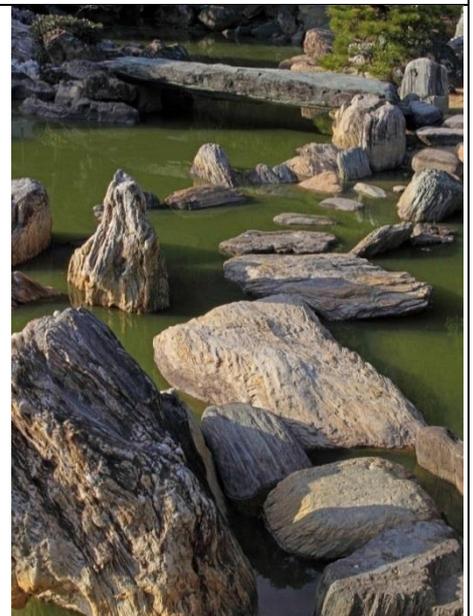
鯉魚(左)が龍(右)に化身した瞬間を中央の白い球で示す



この大石橋 (10.5m) は当庭のシンボルマークだ。



自然を超えた第二の自然を作った



選択した名石を芸術的な造形として再構築

No. 35 Nagoya-jō (名古屋城) Castle Garden

Period: Edo (c. 1615)

Address: 1-1Honmaru Naka-ku, Nagoya

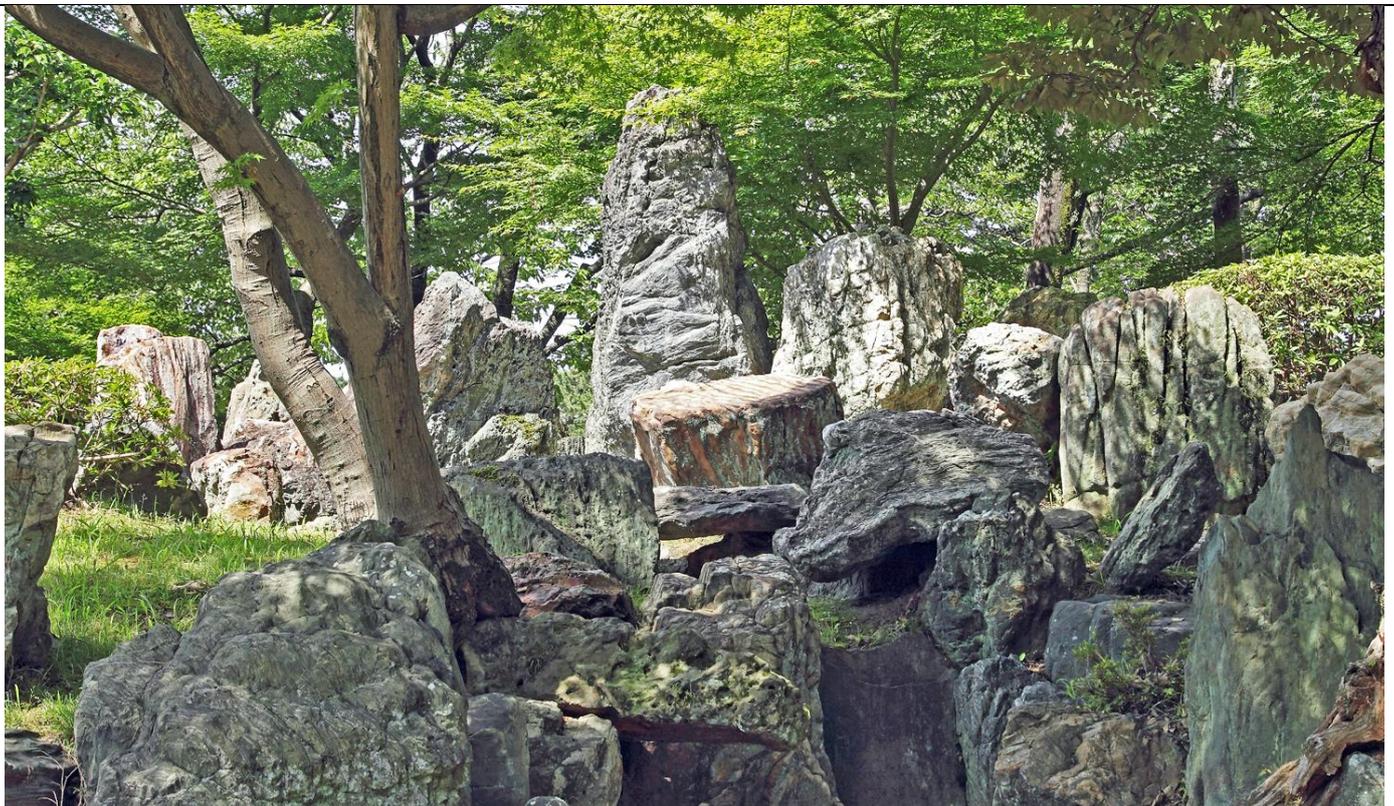
Designer: Ueda Sōko

Web: http://www.nagoyajo.city.nagoya.jp/13_english/index.html



渡るに渡れない不安定な石橋を象徴している。このテーマの原点は中国の天台山・方広寺にある「石梁飛瀑」に由来している。

作者は「上田宗箇」であるが、彼はこの他に Garden No34 (42 P)、No 36(44 P) も作っている。作者の S. Ueda は武士にして、大茶人でもあったが、作庭の才能もあり、各地の城で庭園を作った。彼は地形を活かし、さらに石の特性を活かしたダイナミックな石組だ。



南庭滝石組：作者は表千家の茶人、吉田紹和によって 1881 年に、東庭を移築したもの。

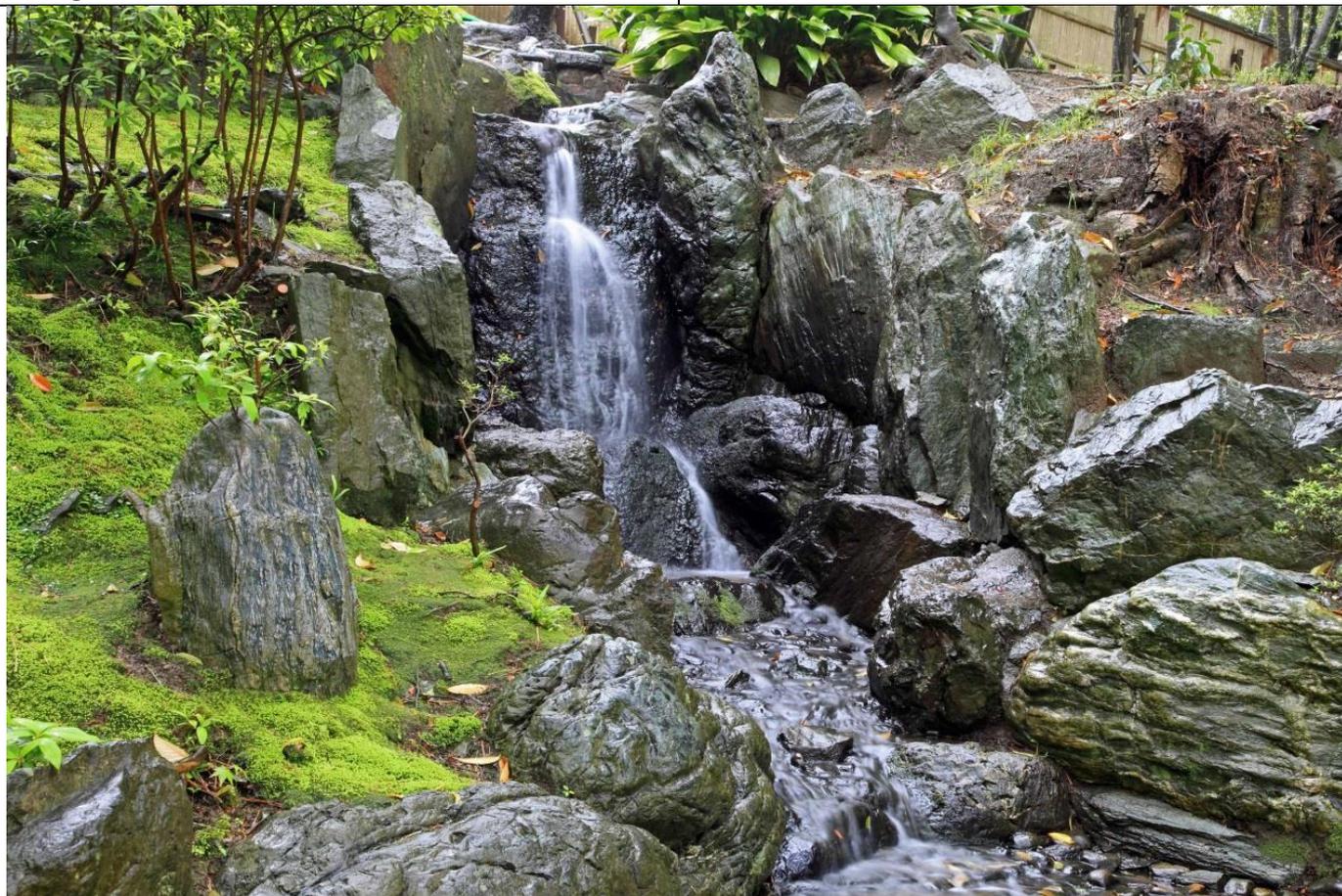
No. 36 Wakayama-Jō (和歌山城) Castle Garden

Period: Edo (c. 1619)

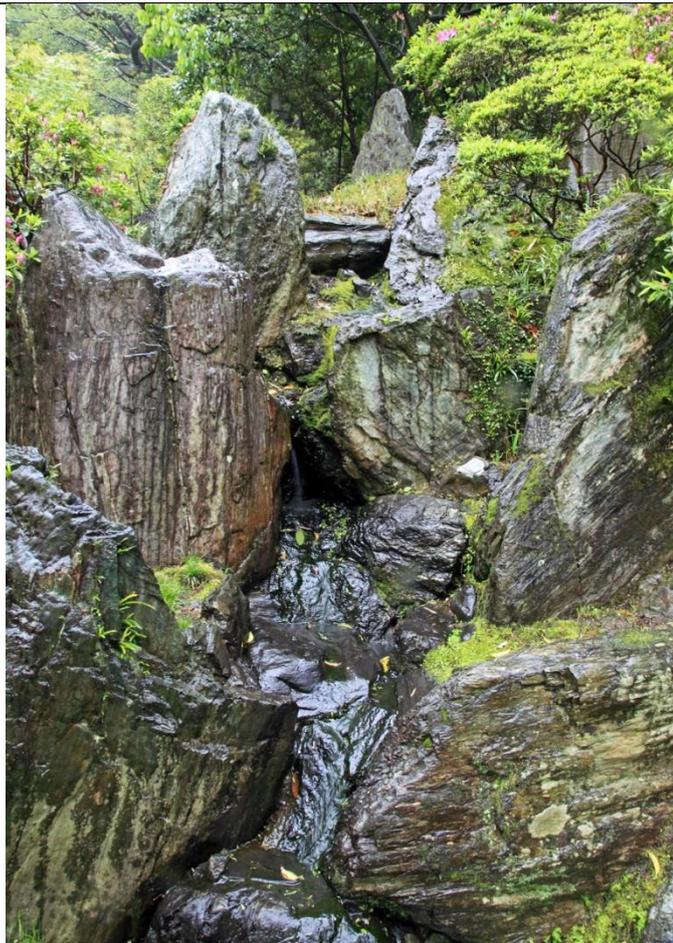
Address: Wakayama City

Designer: Ueda Sōko

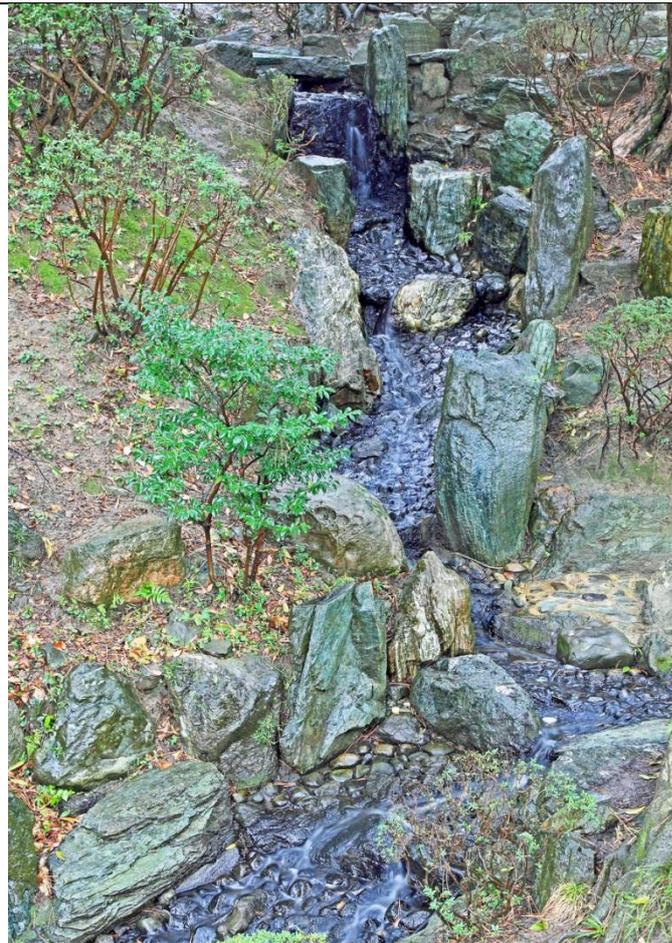
Tel: 073-435-1044



西の滝：有名な徳島産の青石をふんだんに使った滝の造形



東の滝：作庭を「組む」または「畳む」と言ったがまさに畳んでいる。



中の滝：滝は石橋を潜ると急転直下流れ落ちる

No. 37 Raikyū-ji (頼久寺) Temple Garden

Period: Edo (c. 1605)

Address: Takahashi City (Okayama Pref.)

Designer: Kobori Enshū

Tel: 0866-22-3516



書院からの庭園



愛宕山を蓬莱山として見立て、鶴島(手前)、亀島(奥)



左記写真の庭園部拡大鶴島(手前)、亀島(左奥)



右下の富士山型の石は小堀のサイン



有り合わせの石で作った実用美



秀逸な自然界と人工界の遮断の手法



如何にも田舎の山寺の雰囲気があり、開かれた寺でのんびりしたい。

No. 38 Nijō-Jō Castle (二条城) Garden

Period: Edo (c. 1626)

Address: nakagyō-ku, Kyoto

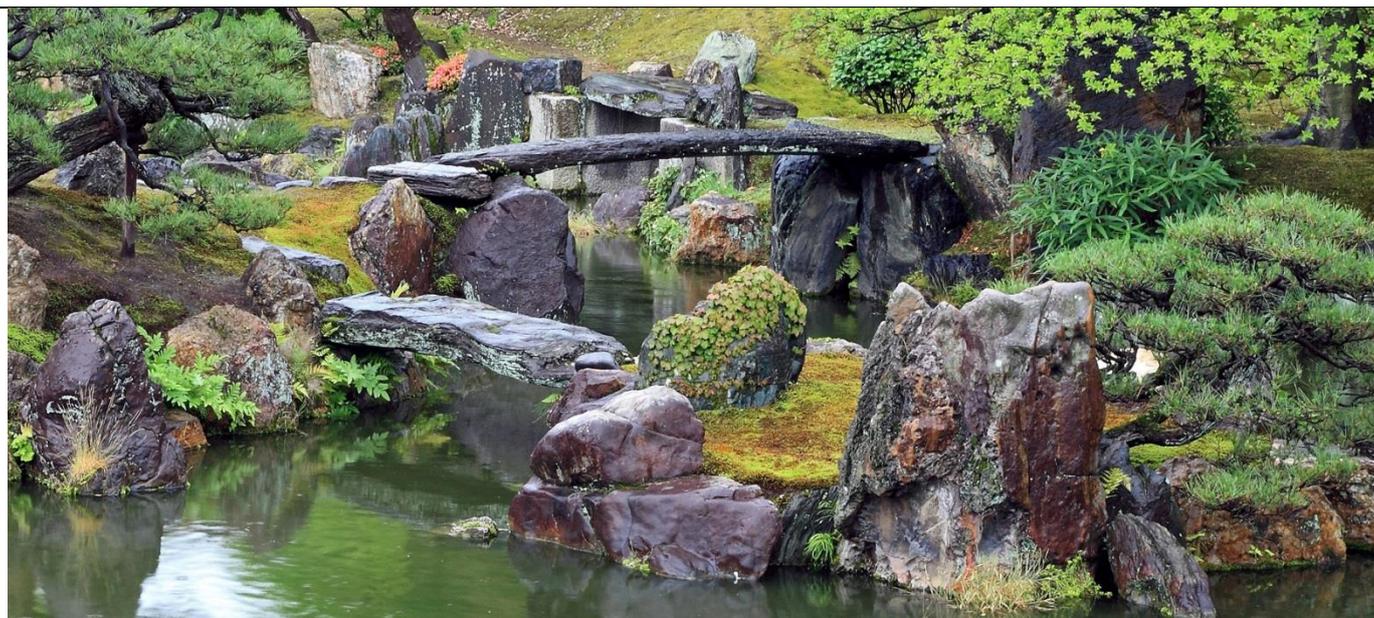
Designer: Kobori Enshū

<http://www2.city.kyoto.lg.jp/bunshi/nijojo/english/teien/index.html>



天下人(徳川将軍)の庭は広く且つ豪華で、ぎっしりと詰まった石組は一分のスキもなく息がつまりそうである。護岸となる石も二重三重に組まれ、このような圧迫感のある庭になり、以降このような迫力のある庭は出現しない。尚この庭は後水尾天皇を迎えるために小堀遠州が改修したもの。

護岸石組の造形が極地に達した作品。日本庭園が更に芸術化するためには、石組護岸だけの造形から脱皮が必要。そのためには護岸の不必要な枯山水庭園へのアプローチか、池泉庭園の場合は築山部への石組、テーマを鶴や亀からの脱皮、池中への布石など。



右端の焼け爛れたような石は亀島の亀頭石。桃山時代の絢爛豪華な庭の代表。



入園して初めに目にする景色



巨石による石組に圧倒される

No. 39 Konchi-in (金地院) Temple Garden

Period: Edo (c.1632)

Address: Nanzen-ji Sakyō-ku Kyoto City

Designer: Kobori Enshū

Tel: 075-771-3511



左右の亀島・鶴島が海洋に浮かび、中央には伝説の蓬莱山。

鶴島は鶴首石で鶴を象徴して秀逸であり、さらに鶴の背には三尊石組による羽石の造形や、その他に多くの色石が組まれ圧巻である。亀島は伏せた形の亀頭石は力強く迫力がある。また亀の背に聳えている樹齢700年とも云われている柏槇(びやくしん)は聖樹であり、その姿は荘厳とでもいべきか。



特に鶴島は護岸石組から脱皮して、鶴島の背は石組で覆われた斬新な造形。



鶴島の造形は圧巻である。従来の鶴島は池庭に作られたので、護岸の造形のみで神仙島を象徴した。当庭は枯山水庭園のため護岸石組に捉われることが無く、造形本位で鶴の背中を巨石で覆い尽くした。立石と横石で幾何学模様の造形を開発した。

この庭の真の目的は鶴島背後に見える東照宮(徳川家康を祭った)を遥拝することである。

No. 40 Sentō Imperial Palace (仙洞御所) Garden

Period: Muromachi (c. 1636)

Address: Kyoto City

Designer: Kobori

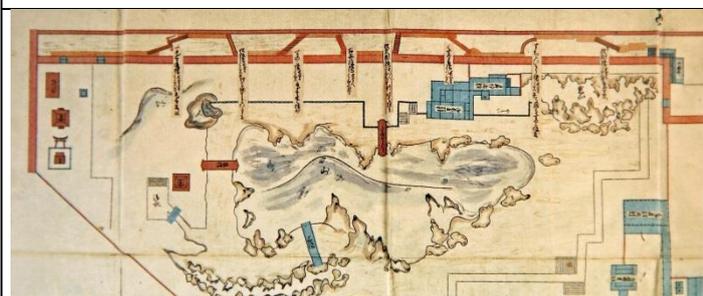
Reservation Required, <http://sankan.kunaicho.go.jp/english/index.html>



広大な石浜を作るにあたって、京都所司代であった小田原藩主大久保忠真が寄進した。この石が「一升石」と呼ばれるのは、米一升と石一個と交換したから。色、形、大きさが吟味されている



この写真の部分は改造されずに、小堀遠州の作った幾何学模様の造形が残った。一般的には護岸石組は複雑に前後左右に組むのであったが、彼は一直線の切石を使い斬新な造形を試みた。



小堀遠州の設計図



小堀遠州が作った護岸石組（一直線に組まれた巨石）。

No. 41 Shūgakuin Imperial Villa (修学院離宮) Garden

Period: Edo (c. 1655-59)

Address: Shūgaku-in Sakyō-ku, Kyoto

Designer: unknown

Reservation Required, <http://sankan.kunaicho.go.jp/english/index.html>



上の茶屋の隣雲亭より浴龍池の万松塙(ばんしょう)と堰堤(長さ 200m)。



千歳橋と浴龍池の紅葉



園内には田畑があり近傍の農家に貸し付けている。



浴龍池堰堤の石垣を植栽で覆った(長さ 200m、高さ 15m)

No. 42 Manshu-in (曼殊院) Temple Garden

Period: Edo (c. 1656)

Address: ichijyō-ji Sakyō-ku, Kyoto

Designer: unknown

Tel: 075-781-5010

極楽をたゆたうような気分にさせてくれる、この庭は良尚(りょうしょう)親王が作ったものである。既に固定化しつつある武家体制に対し、平安時代の古き良き王朝の時代を忍び、古典的な大和絵風の蓬莱神仙の世界に遊び、心の安らぎを得ていたと思われる。庭は永遠の象徴である鶴島、亀島、蓬莱島などから成っているが、そこへ船に乗って渡るかのように、小書院の欄干は船の舷(ふなべり)を現している。



小書院から亀島、蓬莱山を望む。書院の板欄干は舷(ふなべり)を表す。橋は二橋あるが、それぞれ橋添え石が特徴。



この石橋の橋添え石は目を引く大きさであるが、蓬莱山を象徴している。



梟の手水鉢



鶴島に見立てられた松の木



この石橋の橋添え石も変則的な形だ

No. 43 Katsura Imperial Villa (桂離宮) Garden

Period: Edo (c.1617–1662)

Address: Katsuramisono Ukyōku, Kyoto

Designer: unknown

Reservation Required, <http://sankan.kunaicho.go.jp/english/index.html>



洲浜先端にある岬灯籠に視線が集中する。栗石による洲浜の造形が斬新である。建物は茶室の松琴亭



建築と庭園が一体化しているため、恰も庭園の中にいるような錯覚を覚える。

桂離宮には延段、飛び石が多くありすべてに工夫が施されている。



真の飛石



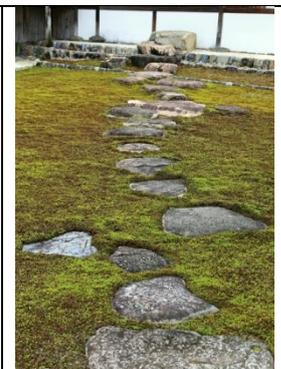
行の延段



草の延段



霰こぼし



七五三飛石

No. 44 Ōmi-Kohō-an (近江孤蓬庵) Temple Garden

Period: Edo (c. 1653)

Address: Ueno-machi Nagahama City (Shiga Pref.)

Designer: Kobori Sōkei

Tel: 0749-74-2116

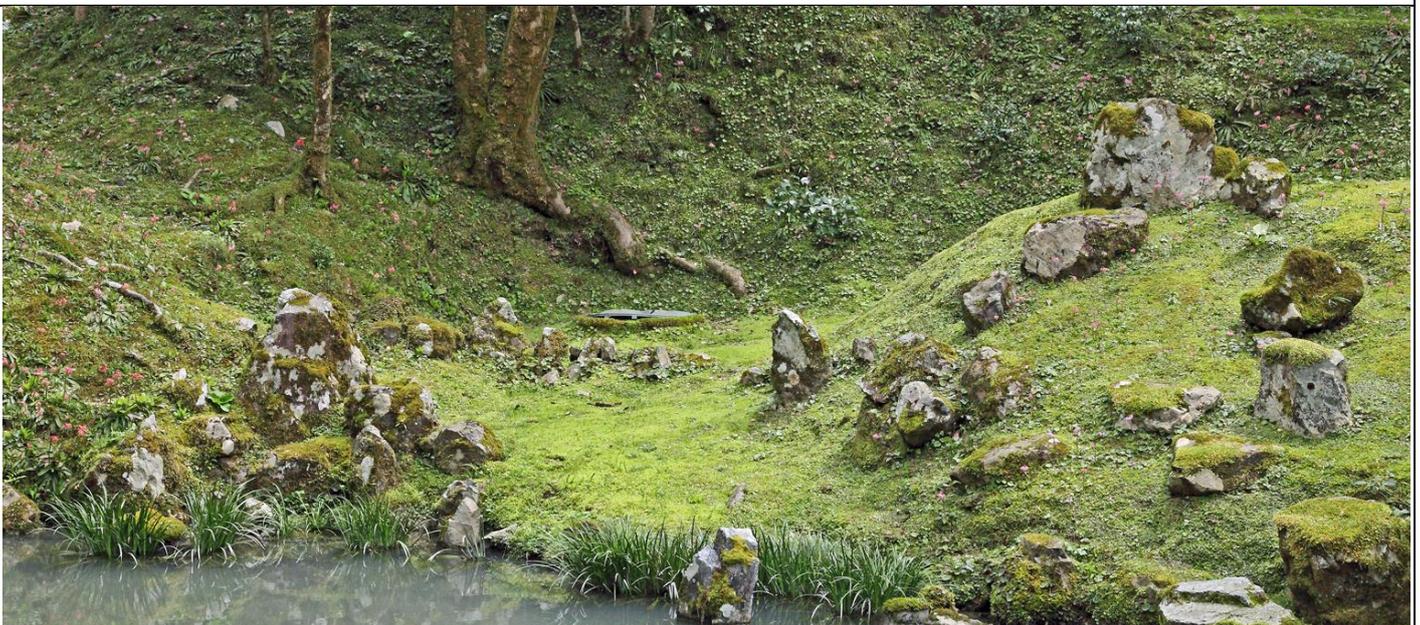


小堀遠州の菩提寺として2代目の小堀宗慶が作った庭

美しい釘隠し



ゆったりとした大らかな景色にこころが癒される。苔地の起伏での造園の手法と云える。



池の背後には緩やかな曲線を描いた築山に石組がされている

No. 45 Ritsurin-kōen (栗林公園) Park Garden

Period: Edo (c. 1640)

Address: Takamatsu (Kagawa Pref.)

Designer: unknown

Web: <https://www.my-kagawa.jp/en/ritsurin/>



観音霊場「補陀落山」に因んで「小補陀-しょうふだ」と言われた石組みがある。
1400年頃室町時代の豪族佐藤家が作ったとの伝承がある。もし、これが事実であれば
日本庭園が抽象化への大きな一歩と云える。



飛来峰から偃月橋（えんげつきょう）越しに「仙礫」と言われる6石に見える3石の石がある。蓬莱山が揺らいで見えただため、相似形の石を組んだと思われる。

備考）古代中国では蜃気楼現象から不老不死伝説が生まれ、蓬莱山伝説が始まった。



蓬莱山の象徴とし、相似形の石蜃気楼を表現した



天女島には奇怪な石が所狭しと配石

No. 46 Entsū-ji (圓通寺) Temple Garden

Period: **Edo (c. 1643)**

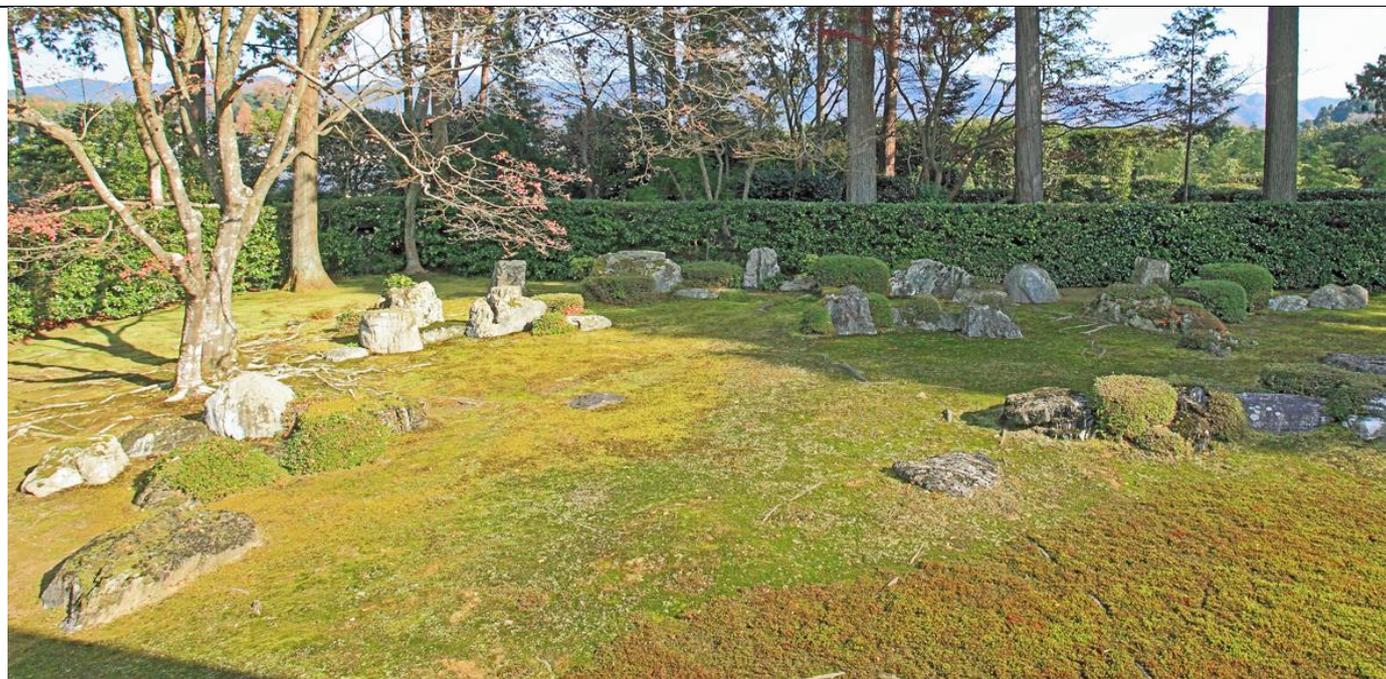
Address: Iwakura Sakyō-ku, Kyoto

Designer: **Gyokuen Nisshu**

Tel: 075-781-1875



最も有名な借景の庭である。自然の中にあつて庭園が自然と拮抗できるのは、自然の模倣ではなく抽象化した人工造形美でなければならない。ただし自然美と人工美を好対照させるためには、庭園と自然の境界線は、この庭の生垣の様に明確な境界線が必要だ。玉淵の普門寺・雑華院の庭は、いずれも借景の庭。



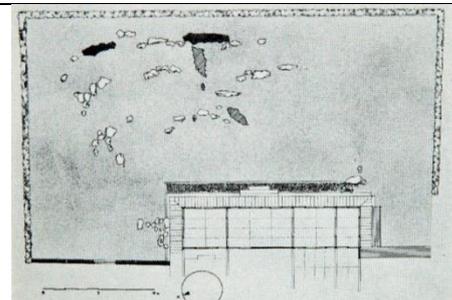
三波の波の造形。本来白砂であり、園内にはツツジやカエデは無く躍動的な龍安寺とも



有名な盤陀石は現在は買い戻され玄関にある。



『拾遺都名所絵図』では盤陀石(右端)があり、龍安寺の様な白砂。



大山平四郎著『龍安寺石庭』の黒色の石は現在玄関にある盤陀石。

No. 47 Fumon-ji (普門寺) Temple Garden

Period: Edo (c. 1655)

Address: 4 Tomita-chō Takatsuki (Osaka Pref.)

Designer: Gyokuen Nisshu

Tel: 072-694-2093



庭は水墨画のようである。中央に大きな出島を配し、左側に大きな枯滝があり、右奥の切石橋は溪流が河に出る谷口に掛けてある。



枯滝は橋を潜って大河となって流れ下る。石橋は全体に深く埋めて組み、盛り上がるような力強さを感じる。中央の枯滝は右に回って落ちている。右端の水平な石は立石の滝と均衡している。



向かって右側にある溪流に架かる滝



石組みを背後から見ると、断面の造形が印象的だ

No. 48 Daitō-ji (大通寺) Temple Gardens

Period: Edo (c. 1603–1779)

Address: Nagahama (Shiga Pref.)

Designer: unknown

Tel: 0749-62-0054



含山軒: 枯滝の石は大変稀な石で、しかも石組みは格調が高く緊張感がある庭。霊峰伊吹山と呼応した人工造形美だ。石の選択、石組の技量申し分ないのに、植栽のメンテナンスがこの庭の魅力を減じている。



学問所跡: 石組みが剛健で布石に均衡がとれ、石橋奥の滝石組造形が良い



学問所跡: 上記庭園を横から見た造形



蘭亭: 高く主石を抱き上げるように、足元に寄り添う大小の立石から構成される造形

No. 49 Fukuden-ji (福田寺) Temple Garden

Period: Edo (c. 1643)

Address: 1049 Nagasawa maibara (Shiga Pref.)

Designer: unknown

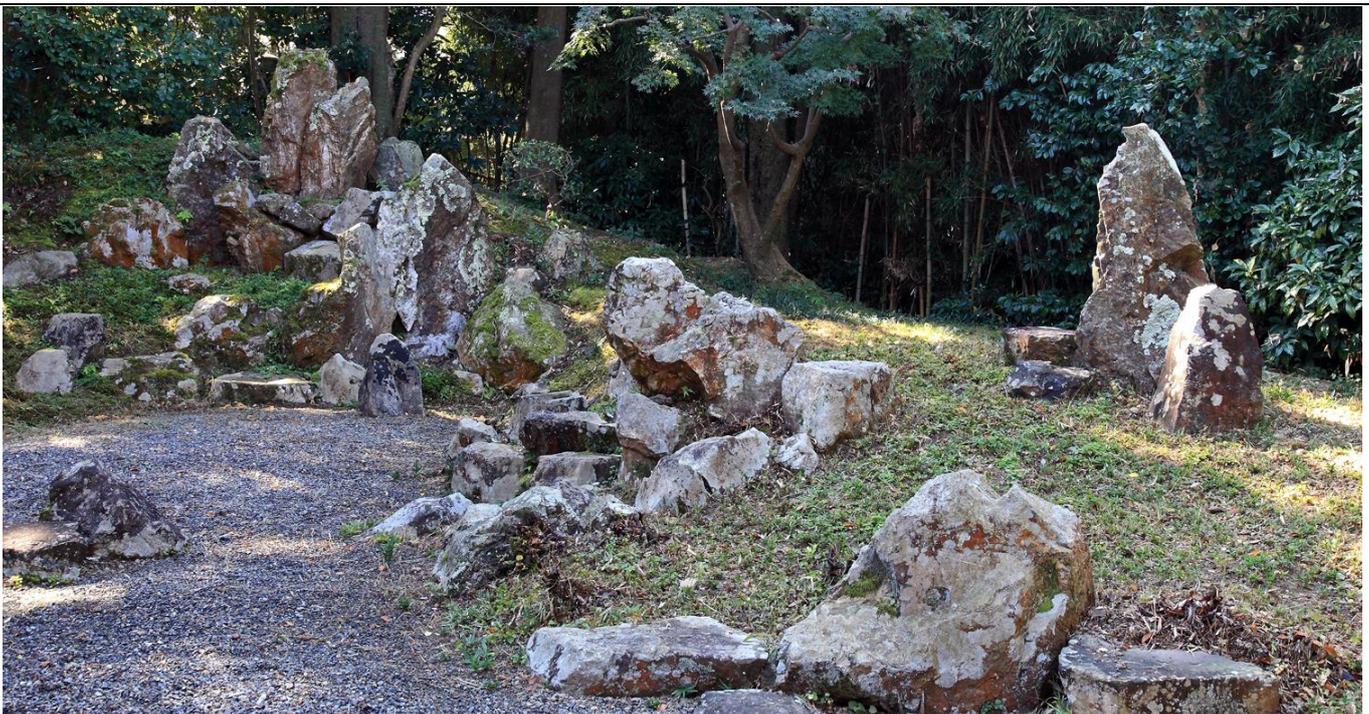
Private



石組の分布が前後に深く、石数も過不足なく見事な空間構成をなしている。中島も無く、石橋も無い単純明快な構成で、これ見よがしな局部的な過剰な石組に偏重せず、手前の石組みと奥の石組相互間の関係性から生ずる遠近感、大小感、高低感など、複合的な対照感が相乗して空間構成美を増幅している。

右側出島の先端にある強く傾斜したライオンのような巨石と変幻自在な護岸石組みがあるが、水墨画のオーバーハングの山塊を象徴。また、奥に行くほど高くなる地割は逆遠近法で、見るものに枯滝が迫ってくる。地割の空間構成美を支えているのは、適度に欠損部のある稜角の強い石の選択だ。

【See No.23 Gangyō-ji (31 P), No.29 Nishihongan-ji (37 P), No.33 Akada-ke (41 P)】



貴賓席から見る景観：地割は高さ 50 cm の盛土を左右両側より配置し、その盛土に配布されている石組みと正面奥の滝組とが呼応して、見事な緊張感を形成している。さらに中央部には大きな築山を形成し、そこに巨石による枯滝を組んでいる。なお、出島の護岸石は低く丸い石を選び、視線を奥に誘導している。

No. 50 Seigan-ji (青岸寺) Temple Garden

Period: Edo (c. 1678)

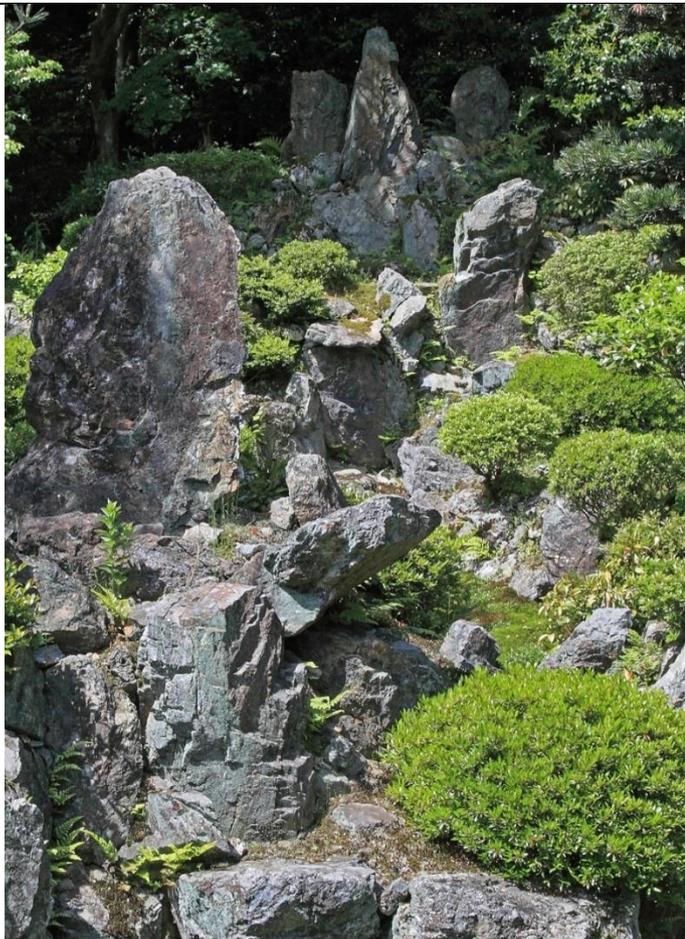
Designer: kōkin Shōdō

Address: 669 Maibara Maibara City (Shiga Pref.)

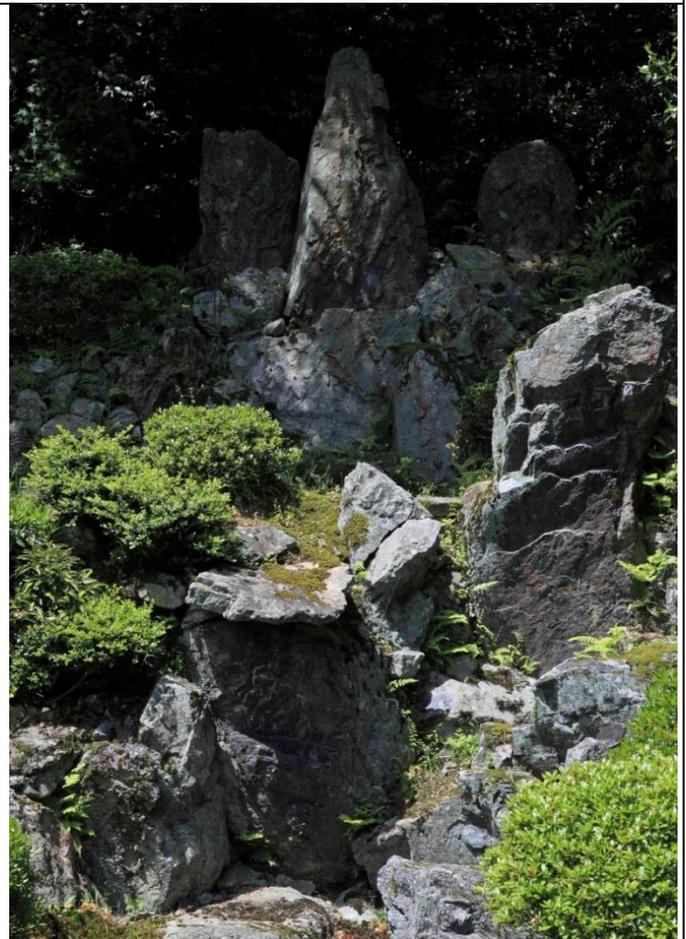
Tel: 0749-52-0463



写真中央の不動の滝の石は表面が荒々しく褶曲して、しかも全体が弓なりに反っている。この枯滝組の造形は手練の石組みで、天才的な手腕の持ち主としか言いようがない。



地割の特徴は間口に対して奥行きが深く、奥に行くに従って山畔が高くなり、更に最深部の三尊石部は盛土までしており、奥行きのある立体造形が見どころ。



上には盛土が見える三尊石組と下には荒々しい石の不動尊枯滝。この地割と石の選択が最高傑作庭園を生み出している。

No. 51 Shūon-an (酬恩庵) Temple Garden

Period: Edo (c.1650)

Address: Takigi-satonouchi Kyōtanabe (Kyoto Pref.)

Designer: unknown

Web: <http://www.ikkyuji.org/en/>



左側は鶴亀兼用の石組。右側は坐禅石のある龍門瀑庭園



龍門瀑枯山水の庭は右奥に巨大な卵形の石があるが、観音を象徴した石である。その左手前には不動明王を象徴した不動石がある。龍門瀑の鯉魚石が垂直に飛翔している姿は厳しい禅を象徴している。



十六羅漢岩組みは方丈東側にあり、大徳寺本坊のそれを髣髴とさせる。



参道を曲がったところに門があるので、菊の形の穴から拝観したい。〈一休禅師廟所〉

No. 52 Koishikawa Kōrakuen (小石川後樂園) Garden

Period: Edo (c. 1665)

Designer: unknown

Address: 1-6-6 Kōlaku Bunkyo-ku Tokyo Pref.

Web: <http://teien.tokyo-park.or.jp/en/index.html>



亀島(蓬莱山)には徳大寺石と称せられる巨大な板状の石(幅2m、高さ4m)がある。広大な庭園であるが、この石によって印象付けられる。



沢渡(さわたり)のデザイン



白糸の滝: 大名の庭の滝は巨石により豪華なものになる。信仰のためではなく、名所写しのため



西湖にある石堤を模して作った(円月橋同様に水戸光圀が招いた儒者・朱舜水の指導で作られた)



円月橋

No. 53 “Genkyū-en” (玄宮園) Garden

Period: Edo (c. 1677)

Designer: unknown

Address: Hikone, Shiga Pref.

Tel : 0749-22-2954



Hikone Castle Garden: 護岸・島中・池中・沿路にある、独立した石が醸し出す雰囲気は神秘的であり重厚でもある。何物も象徴せず、完全に抽象化された造形である。まさに「江戸時代の龍安寺」とも云える日本庭園の最高傑作。

考察) 池泉庭園の護岸の石組は旧徳島城(42P)や二条城(46P)で極致に達し、護岸の修景は終焉する。以降「脱護岸」造形の試みの一つとして、池中に石を配石した玄宮園が出来た。更にまた、築山への造形の試みも行った。



上記写真を反対側から撮った池中の石組



金亀城を背景に臨池閣



鶴鳴渚の鶴石組が当庭のシンボル



右端が亀頭石

No. 54 “Rakuraku-en” (楽々園) Garden

Period: Edo (c. 1677)

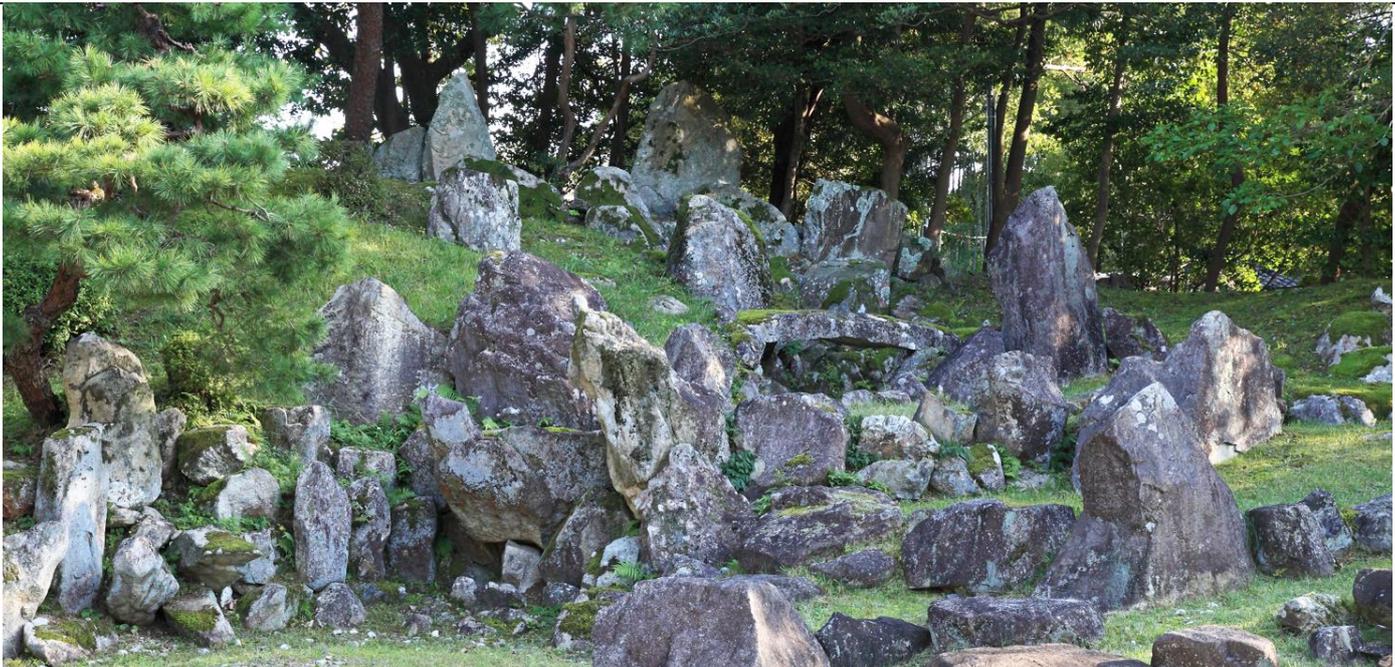
Designer: unknown

Address: Hikone , Shiga Pref.

Tel: 0749-22-2742



Hikone Castle Garden: 写真上部には深山幽谷の溪流はやがて激流になり滝からほとぼしり落ち、将に水墨画の世界。怒涛のように流れてくる溪流が末端の軸状の石から奔流のように落ちる。この水は滝壺で泡立っている様子を丸い石で象徴している。



この庭は本来、米原市の青岸寺に桃山末期（1610年頃）井伊家の藩主の加護を受けて作られたのであった。しかし、藩主は彦根城二の丸の櫓御殿を建設した際に旧青岸寺庭園を引き渡すように指示し、そのままの形で城内に復元された。よって当庭は江戸時代に組み直された庭であるが、当初作られた桃山末期の特徴である雄渾な造形である。頂部に須弥山石、中央に玉澗式の石橋、さらに特徴的なのは枯滝尻に滝の水泡が造形されている。

No. 55 Okayama Kōraku-en (岡山後樂園) Garden

Period: Edo (c. 1689)

Address: Okayama City

Designer: unknown

Web: <http://www.okayama-korakuen.jp/english/>



唯心山から沢の池と曲水を望む



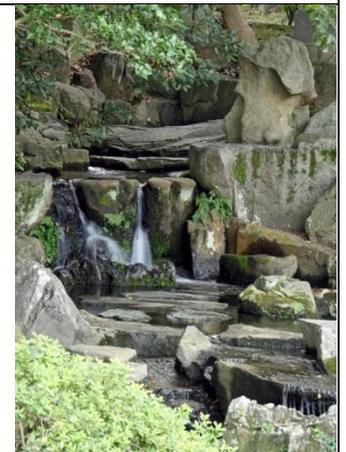
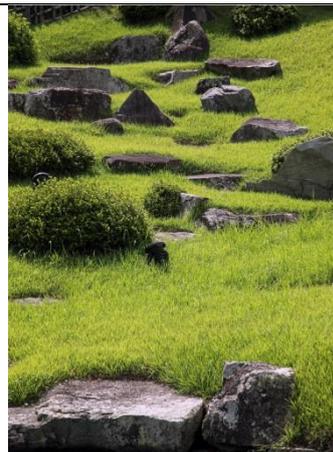
緑の絨毯の様な芝生の中を曲水がゆったりと流れる



流店



唯心山の枯滝



花葉の滝

No. 56 Shiba-rikyū (芝離宮) Garden

Period: Edo (c. 1686)

Designer: unknown

Address: Minato-ku, Tokyo

Web: <https://www.tokyo-park.or.jp/english/>



近代的感覚の造形は重森三玲の庭を思い起こさせる。このような庭園が出来たのは大名の大久保家の領地から運んだ根府川石に負うところが大きいと思う。この時代になると脱護岸修景が始まり築山への石組が始まるが、この庭はその代表的な例だ。



中国趣味の象徴として西湖提の様な石橋が、多くの大名庭園に作られた



護岸の造形には興味を失って蓬萊山を丹念に造形した。

No. 57 Katsura-ke (桂家庭園) Family Garden

Period: Edo (c. 1712)
Designer: Katsura Unpei

Address: Yamaguti Pref.
Private



三田尻港で風待ちしていた帆船が、東風が吹くと、一斉に出帆する風景を「風の流れと船の動き」で抽象的に表現した。また細かな技法にも気を配り、土塀の高さを低くし、背後の天神山を見えるようにして借景の庭にした(自然界に対して人工界を際立たせるため)。庭の奥行感を出すために、奥に行くに従って庭の幅を狭くした遠近法を駆使している。



日本庭園史において、自然石から最も野心的な造形を石組した。L字型庭園の屈曲部には庭園を際立たせている独創的な造形がある。この造形は類型的ではなく、全くの創作であり、作者の天才的な才能の表れである。

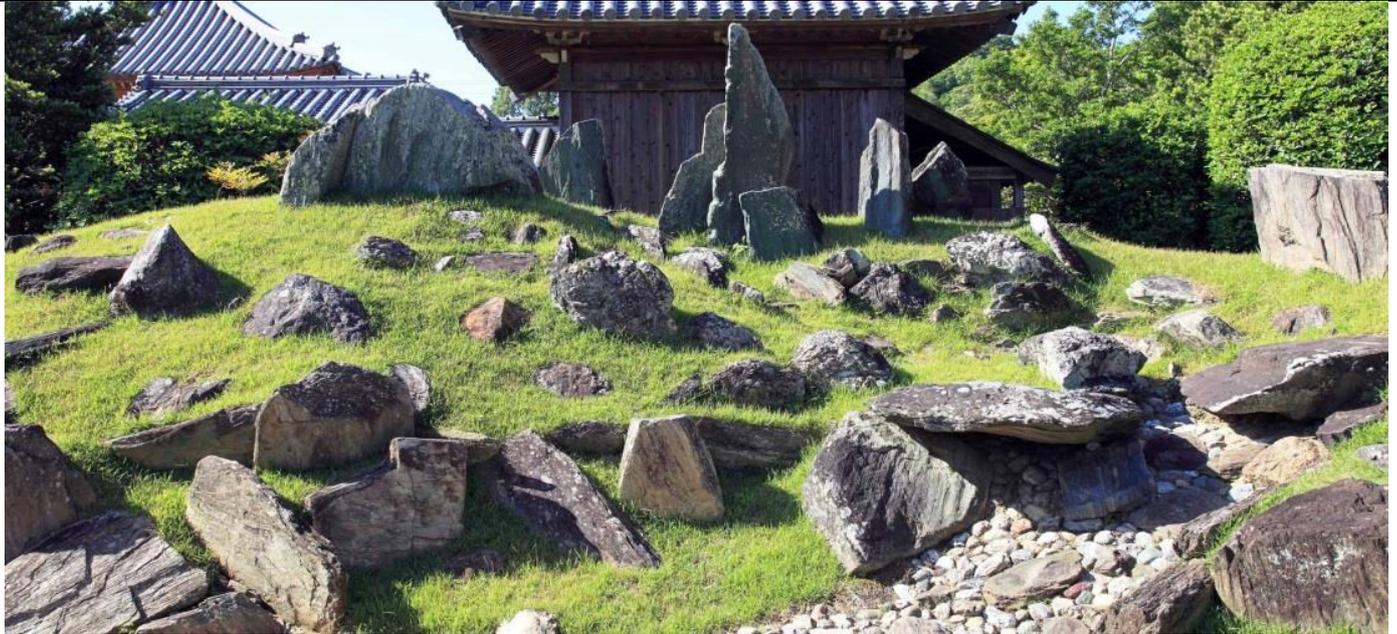
No. 58 Awakokubun-ji (阿波国分寺) Temple Garden

Period: Edo (c.1800)

Designer: unknown

Address: Kokubunji-machi, Tokushima

Tel: 0886-42-0525



この庭は中国の廬山を象徴した造形である。石組は自由でダイナミックだ。



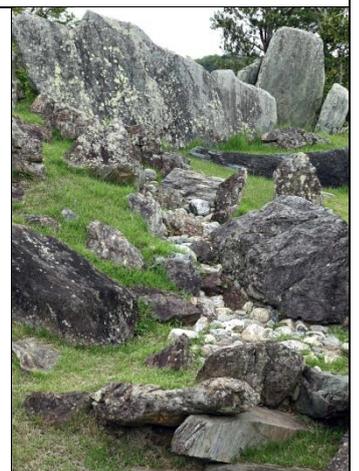
巨石による洞窟状の造形は廬山に実在する洞窟状の形を人工的に再現した。



須弥山石組



3 - 5 m の鱗片状石の輪舞



中国廬山の象徴

No. 59 Kurushima-ke- Clan Garden

Period: End of Edo (c.1830)

Designer: Hashimoto Tōzō

Address: Suehiro Shrine kusu-machi, Oita Pref.

Tel: 0973-72-3833 (Suehiro Shrine)

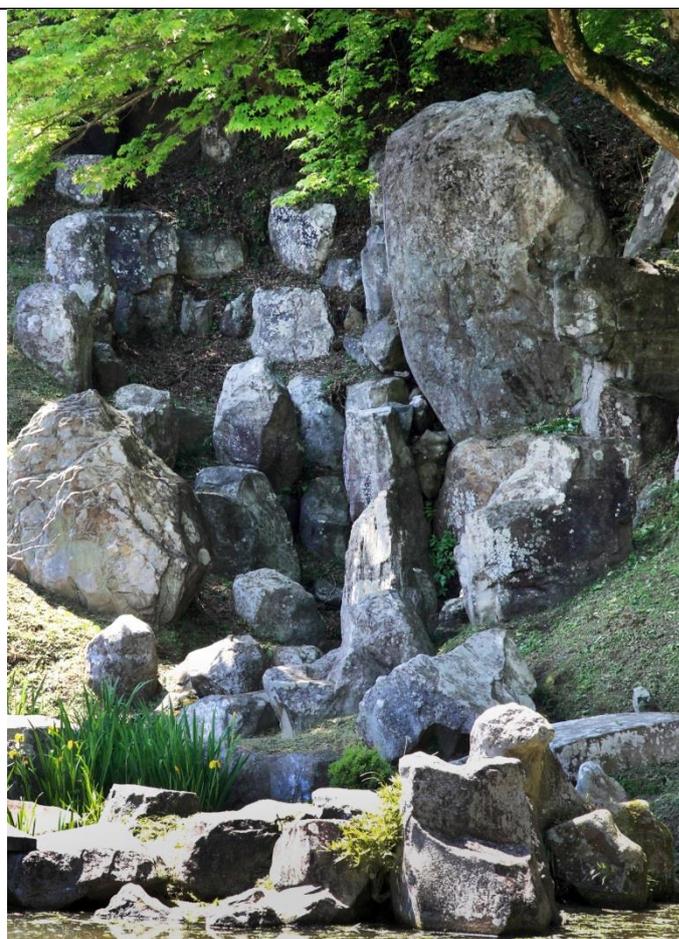


Seihōrō Garden: 複数の石を組み合わせるのではなく、個々の石が独立した抽象造形



Seihōrō Garden : 借景の庭

巨石による大胆な石組と優美な九重連山の好対照が借景庭園の醍醐味。



Hanshu Garden : 圧巻な枯滝

豪快な石組みは日本庭園史上最も特筆される。単に力任せに巨石を並べるのではなく、自然を超えた人工の抽象造形。

No. 60 Jingū-ji (神宮寺) Temple Garden

Period: End of Edo
Designer: unknown

Address: Nushima Nantan-tyō, Hyogo Pref.
Tel: 0799-57-0029



山畔を活かした石組は古典的な鶴亀石組から離れた、近代的な造形を求める精神に由来する



意図する造形ではなく、自由に遊び心のある庭だ。【Garden No. 58 Awa-Kokubun-ji (66P)】

No. 61 Tōkai-an (東海庵) Temple Garden

Period: Edo (c. 1814)
Designer: Tōboku Sōho

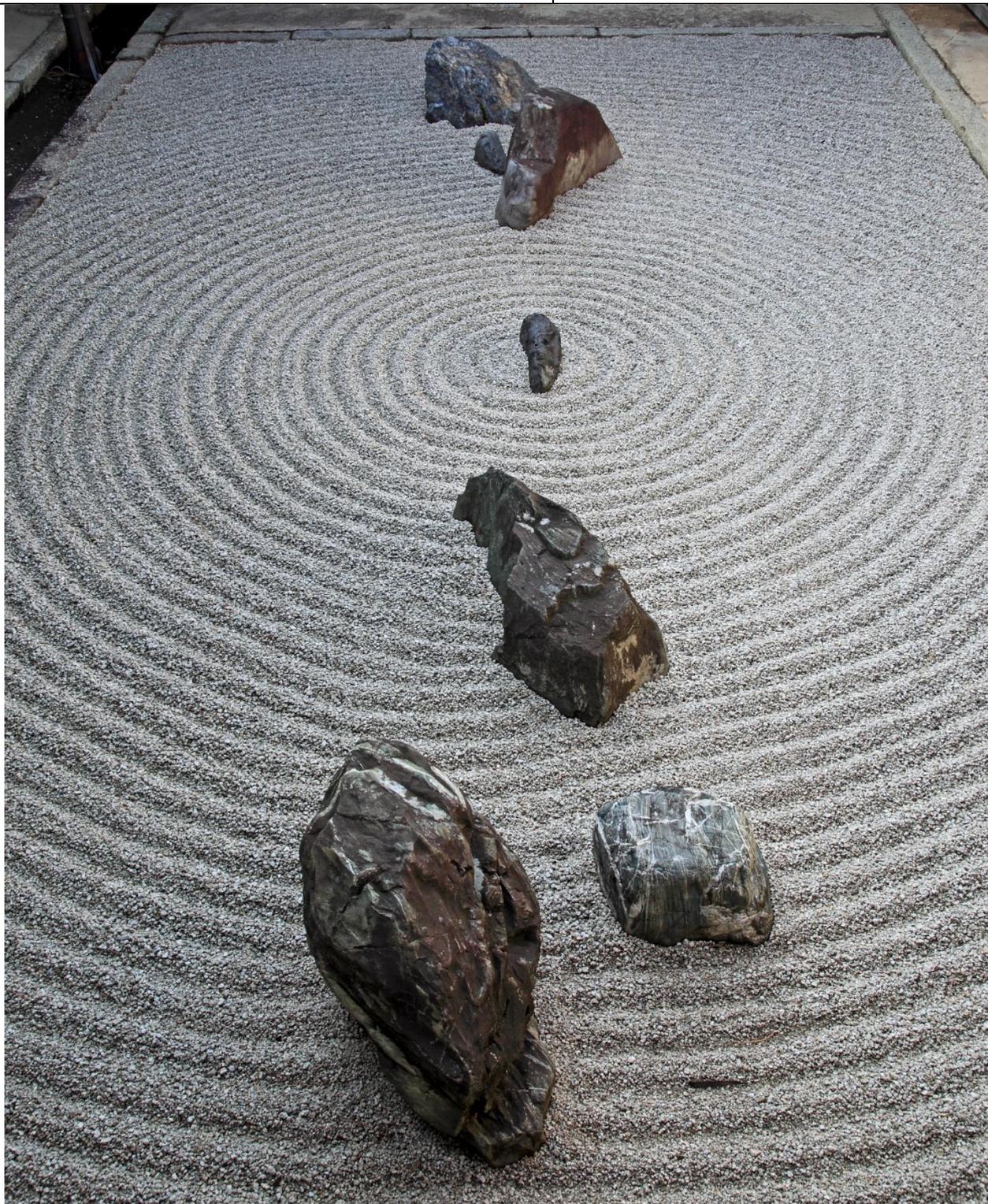
Address: Myōshin-ji Ukyōku, Kyoto
Tel: Private



総ての音を吸収した「絶対静寂」



書院から見た景



厳粛で静謐な抽象枯山水庭園。「江戸時代末期の龍安寺」と云える。高度に精神的な庭を作った。

No. 62 Kokawa-dera (粉河寺) Temple Garden

Period: Edo (c. 1830)

Address: Kokawa-machi Kinokawa ,Wakayama Pref.

Designer: unknown

Tel: 0736-73-3255



本堂の基壇の擁壁部に作られた壁面庭園とも云える。この写真の右側にも、このような石組のある壮大な造形。



力強い石組みの庭。江戸時代末期においてこのような力強い石組をするエネルギーが育まれていた。テーマは鶴島・亀島・蓬莱山、そして石橋は中国の天台山・方広寺にある「石梁飛瀑」を象徴している。

【See Garden No. 35 名古屋城(43 P), No. 86 漢陽寺(97 P)】



側面から見た石組み



自由奔放な石組



中国の「石梁飛瀑」がテーマ

No. 63 Kyū-Sekiyama-Hōgon-in (旧関山宝蔵院) Shrine Garden

Period: Edo (c.)

Address: 4808 Sekiyama Myōkō City ,Niigata Pref.

Designer: unknown

Tel: 0255-74-0004

霊峰妙高山を荘厳する祭壇とも言うべき神聖な庭園。妙高山の神聖な湧き水を石樋で導水して滝の上部から布滝を落とす滝を主体とした庭である（落差約5m）。修験道の霊山を崇拜する特殊な形態の庭園である。

当庭園は庭園という言葉を用いることに躊躇する。滝組の背後に借景的に妙高山が見えるというのではなく、妙高山そのものがご神体であり、聖水による滝組もご神体の一部である。観賞の対象というよりも畏敬して崇拜の対照である。特殊な形態の文化遺産である。2018年に滝組が復元され特殊な庭園の面目が一新された。



霊峰の妙高岳の雪解け水の霊水を滝として落とす。約5mある段差のある地形に緻密な石組をした。



滝組復元前（困難な復元工事）



復元前の滝組（急峻な傾斜地）



滝組側面

No. 64 Niō-hannyakyo (仁王般若経の庭) Garden

Period: Edo (c.1672)

Address: Imai Matsumoto City (Nagano Pref.)

Designer: unknown

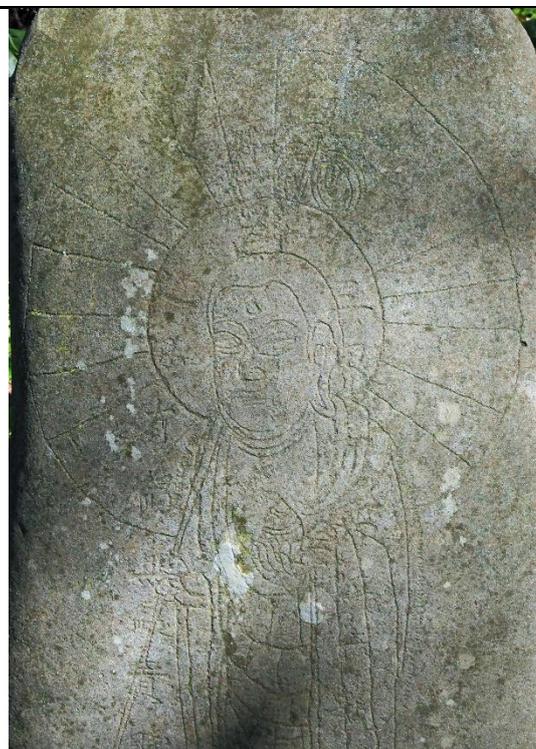
Visitation: Private

某家墓地に隣接した場所に、先祖を供養した石組がある。庭園としては異色で存在であるが、中央にある三重の塔が線刻された石を大日如来と見立て、四方には東西南北を意識して阿閼如来（あしゅく）、阿弥陀如来、宝生如来、釈迦如来があり、入口部には獅子（巻き毛）・狛犬（スリムで角あり）と一对の隨身（冠・風折鳥帽子）が彫線刻された石がある。奥の東側には四基の如来名号碑【「南無阿弥陀仏」「南無釈迦牟尼仏」「南無阿閼如来」「南無宝生尊如来」】あり、中央の立石には「奉稱讚仁王般若経一千部二世安（楽）」と刻まれた寛文12年（1672年）の石碑がある。

よって、某家の子孫が先祖（三郎右衛門）を供養するために「仁王般若経」を読誦した供養の石組である。言わば、真言密教の「立体曼荼羅」と言える。日本には真言宗の寺は多いが、このように教理を視覚化した造形の庭は他には見当たらず、貴重な宗教遺産である。なお庭園として新発見である。



祖先を供養するために、真言密教「仁王般若経」の教理を視覚化した、言わば「立体曼荼羅の庭」



放射光を負った釈迦如来像



狛犬と一对の獅子(巻き毛がリアル)



仁王般若経の通読供養塔

No. 65 Momose-ke (百瀬家) Family Garden

Period: Edo

Designer: unknown

Address: Hirata Matsumoto (Nagano Pref.)

Reservation Required Tel: 0263-357-2722



横長の大きな築山があり、左右に白い石で組まれた枯滝がある。築山部には蓬莱連山や特徴的な三尊石組みがある。左側の枯石組は龍門瀑風の堅固な石組である。特に右側の石は強く傾斜して存在感がある。



右側の滝は変化のある自由な抽象画を見る思いだ。築山頂部の三尊石組は秀逸な手法だ。